Worst HERO.

空々空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｏｒｓｔ　ＨＥＲＯ．

【Ｎコード】
Ｎ３３０７Ｚ

【作者名】
空々空

【あらすじ】
何もかもに絶望したのはいつ頃だろうか。

六歳？　一番の親友が、俺を裏切った日？
七歳？　家に爆弾が放り投げられた日？
八歳？　その頃唯一信頼していた幼馴染が俺を殺そうとした日？
九歳？　父親が、母親を殺して喰った日？
十歳？　世の中には悪しかいないと気付いた日？

それとも、
十一歳に、人を殺すことで世界を救おうと決意した日？
どれだろうか。いや、この中にあるのだろうか。
解らない。
ただ、今の俺は絶望して世界を歩いて、殺し続けて世界を救おうと決めている。
そんな夢を再確認しつつ、まどろみながら、毛布の温もりを感じて薄っすらと開けた瞼の先には、――美しい蒼碧の空が広がっていた。
でも、その下で地面に寝転がる俺には、ハッピーエンドなんか待っちゃいない。

“誰かが笑う。人の不幸が生まれる”→　責任のなすり付け合い？

母さんの手が、俺の目を、黒い布で隠した。
既に手と足は縛られ、茹でられた芋虫のように、体は棒になっている。
歯が自然とカチカチと小刻みに震え音を鳴らし、体もブルブルと震えていた。
怖い。
痛いことが、もうすぐ始まる。
嫌だ。
でも、抵抗しないのは、何故なのだろうか。
声が聞こえた。母さんの声だ。

「大丈夫、きっと辛くなんてないわ」

言われた瞬間、右太ももに熱に近い激痛が走った。
痛い！　痛いよ母さん！
叫ぶ声は、猿轡（さるぐつわ）をされているせいで「んー！　ぁ゛ー！！」という泣き声交じりの絶叫以下にしかならない。
熱い！　熱い！！！
痛い！　痛い！
どうして！　どうして皆痛い！！　意味が解らない！　誰もが俺をそうやって痛い痛い痛いあ゛ぁ゛あ゛ぁ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛ア゛――！！！！
心の中で絶叫が叫び木霊し悲しみを呼び寄せる。
隣の家のリアちゃんは、こんなことをされないらしい。
じゃあ、俺は何故こんなことをされなければいけないのだ。
意味が解らない。
意味が解らないままに痛みが発生し、涙がぼろぼろ毀れ、体が痙

攣する。
苦しい。辛い。
そして、無限にも思えるような、一分か十秒か十分が終った。時間間隔は一瞬で崩壊していた。
猿轡が外され、目を隠す布も取れる。
足を縛る紐と手首を縛っていた紐は解かれ、俺の体は自由になった。
目の前に、ニコニコと嬉しそうな笑みを浮かべた母さんがいた。
涙で嗚咽の声を出しながら肩を震わせていると、
「大丈夫。きっと喜んでくれるから」
言葉だけが、なんの温もりも愛情も運ばずに、俺の心を撫でた。
俺は、俺の心は、何を感じているのかまったく解らず、ただ頷いた。
そして、俺の右の太ももに大量の消毒液が掛「いッ、ガっ！」けられ、その上に大きなガーゼが貼られ、そして包帯が巻かれた。
全身から熱を持った汗が噴き出し、その汗が傷に染みた。太ももの一部に、酷い痛痒を感じた。
掻き毟りたい。
だけど、それはしたくなかった。
だって、だって、そこには。

●

…そこにあるのは――、

「――ッ！」

目が一瞬で開き、精神が幻の痛みを右の太ももに与え、掻き毟りたい衝動に襲われる。

全身が嫌に粘つく汗で塗(まみ)れ、息は荒れていた。

「……はッ、ハ、ッ。……夢、か……」

五秒間、周囲の風景を睨むように注視していたが、変化が無い事に気付くと、ようやく思考は冷静になった。

思わず長い安堵の息が出て、そして右手で頭を支えた。額にも汗があり、それが酷く不快だった。

「……久しぶり、か」

過去の夢を見るのは、本当に久しぶりだ。

腕が勝手に、自分の太ももを撫でた。

夢の痛みが幻痛といえど存在して、恐怖が心を掻き毟った。

思わず、首からぶら下がる十字架のあるシルバーネックレスを優しく握る。

最悪な過去の中で、唯一嬉しかった思い出に触れる。

触れられる。

近づける。

また、手をつなげるじゃないか。

そのための手が、いまここにあるんだ。

だから、大丈夫。

不思議と心は安心感で一杯になり、息も落ち着いた。

「大丈夫……」

もう大丈夫だから。
だから、立ち上がれる。
痛みも悲しみも苦しみも、嘆きも絶叫も、俺は、ちゃんと抱えて、立ち上がれる。
百回腕をもがれても、百一回腕を再生させて地面を掴む。
足を二百回折られても、二百一回再生させて地面を踏む。
そうして、立ち上がれる。
痛いからと、泣かずに。苦しいからと、泣かずに。あの時誓ったように、絶対に、必死に、立ち上がれる。
昔にそう、誓ったのだから。

全人類を抹殺するまで、決して立ち上がるのを止めない――

と。
そう決めたのだから、俺は立ち上がれる。

“金或いは虐殺。もとい蹂躙”↓　ただひたすらに純粋で？

いい天気だ。
四月の半ば。晴天。
非常に心地よく、暖かい。
そして春らしく、視界に広がる光景は中々のものだ。
四方を山々に囲まれ、秘境の村といった風情がある。というか実際に秘境の村に近いほど、四方は山で囲まれ、外界から遮断されているようだ。
視界に絶対見える山々の、緑の葉と桜の花びら。緑とピンクが世界を彩り、心に刺激をもたらす。そして手前に見えるのは村のあぜ道と、その両脇に広がる畑。あぜ道に転がり、畑でうつ伏せになり、家々の壁に寄りかかる、肉体の一部を損失したり頭を砕かれたり血を垂れ流しにする死体が赤い色彩を目に与え、バランスの取れた調和ある彩りになる。
今は緑の、何かしらの穀物が実るだろう葉が生い茂り、質素ながらしっかりした作りの家々が『のどか』とでも言えばいいだろう風景となって心に安寧をもたらす。鼻から吸い込んだ空気は血の濃い鉄錆の臭いと火薬の充満する臭いに隠れるように、緑の葉の匂いと、土の少し乾燥した匂いがする。
落ち着く、と思う。そして、いいねぇ、とも思った。
こういう緑の濃い、恵まれた土地は、いいねぇ。思わず焼き払いたくなっちゃうぜ。
聞くところによると、ここら辺の土地は土が肥えていて、穀物は毎年豊作だとか。
それらを、きょろきょろと眼球を動かして見ながら、欠伸を一つ。
「ん……ふぁぁああ～……、んぅ。……ここら辺は緑多いねぇ。そう思わない？」

太陽の光が眠気を誘発させ、俺はむにゃむにゃと口を動かしながら右の人差し指を動かした。
トリガーに指先を添える。あー、眠(ねむ)。
右手にあるのは、ツインバレル式ソードオフ　・　ショットガン。装填数は一度に二発。今は一発撃ち終えた。
その銃口の先には、顔を鼻水と涙と汗と涎でグシャグシャにし、右腕を根元から失っている男がいる。
狙いは眉間(ストライクゾーン)。その顔の表皮と銃口との距離は、一センチあるだろうか。

「いや俺さー、サブマシンガンとかアサルトライフルとかマシンピストルってどうも苦手でさぁ。ほら、ここに刀あるじゃん？　これ見たら解るだろうけど、俺どっちかって言うと零～近距離戦闘が主なんだよねぇ。まぁ、じゃなきゃソードオフ　・　ショットガンなんて近距離主体の武装を持っちゃいなんだけどねー？」

どうせ反応なんて寄越さないだろうが、一応喋る。
気分だ気分。
男の震えた、血の気を失った唇が動く。

「たすっ」

「――サヨーナラー」

けて、の一言が終る前に、その頭の顎から上が全て吹き飛ぶ。
轟音が炸裂。
ハンマーでスイカを砕くように、頭蓋が爆砕。ショットガンの銃弾を受けた頭蓋の中身もろとも、その衝撃によって後方へ。
肉片と脳漿が飛び散り、ピンク色の液体状の物質がどろっとした

光が、土のキャンバスにぬめりあるピンクを付け足した。頭部は下あごだけの男は、ショットガンの銃弾を至近距離で受け、地面を転がった。五回ほど回転してようやく停止。無論死亡。
火を噴いたのは自分の右手に持っている銃。撃ったのは自分。死んだのは名前も知らないオッサン。

「風景の一部になって春の色彩にでも刺激を与えてくださいねー」

ショットガンをスナップを利かせた手で上に動かす。トリガー上部で折れた銃身を地面に向け、薬莢を重力落下させる。銃身を下に向けた時点で、ポーチから二発の銃弾を指先で挟みながら取り出し、流れる動作で薬莢の納まっていた場所に込めて、またスナップを利かせて銃身を戻し、再装填（リロード）完了。
その全てが神業的速度で、まるで連動するように繋がる。再装填（リロード）に掛かった時間は、要した動作数に見合わず僅か一・五秒。だが彼は、それでも不満があるのか、僅かに首を傾げた。だがすぐに首の角度を戻し、目線を前に向ける。
安全装置を戻す。
そして後ろ腰の専用のホルスターに仕舞う。

「ん……これでー、終わり、かぁ」

周りをキョロキョロ見ても、そこに居るのは死人ばかり。
心臓を貫かれた者、首から上を切断された者、上半身と下半身が別々の場所にある者、頭蓋の半分を失った者、頭が右と左で二つに裂けている物。様々な形で死んでいる。その死体の傍には、ハンドガン、サブマシンガン、使われなかった手榴弾にグレネードランチャー、アサルトライフルもある。
ただ、共通点があるとすれば、刃物か銃弾で殺された、だ。また、この名前も知らない村の住人、というのもあるかもしれない。

死体の数は二十から三十。いやもっとか。最初の十人までは数えていたけど、次からは面倒臭くなって数えない事にした。

（あー……、うん。死体って臭いよな）

まだハエは集っていないが、それでも死臭というより、噴出す血の濃厚な臭いが鼻を刺激する。

くせ、と呟いてから歩き出した。

あぜ道を歩きつつ、そこら辺に散らばっている死体の破片を避けつつ、欠伸を一つ。

まだ日中だ。お日様は地上に転がる死体にも生きている俺にも平等に光を与える。

その光が暖かみを持って肌を焼き、目を少し熱くさせ、体を暖める。

眠い。ひんじょーに眠い。いっその事この場で寝たい。いや寝ようか。ああもう寝たい。

が、今は歩かねば。

「にしても……、っくぁあ〜〜……ふぁむ。……暇な仕事だねぇ……」

そう、仕事。今は仕事のお時間だ。

俺は何でも屋と言うよりは汚い仕事をやって生活している。汚い仕事とはつまり、非道な殺人とかそこら辺。

今日請け負ったのは、“村の住人（異端者）の殺害”と“村長宅の地下にいるであろう、紫の瞳の少女の救出”だ。

その村長宅は村の最奥。

そこへ行く途中で、撃ち殺した人間を漁って、銃弾ねぇかなー、と呟きつつ、自分の持っている銃、――セミオートマチック（半自動式）のハンドガンとツインバレルのソードオフ・ショットガンに使える弾

丸を集めておく。消費した三分の二は手に入れられた。ラッキー。
あっという間に着き、扉を開けて、閉める。
靴を脱がずに入り込み、「地下、地下」と呟きながら散策した。

「どこかな～……」

歩き回る。出来るだけ、ブーツの踵で床の音を探るように。
ごっ、ごっ。ごっ、ごっ。ごっ、ごっ。ごっ、ごっ。ごっ、ごっ。
――コン。
音が軽くなった場所を発見。
ここか、と床の一部を思いっきり踵で踏みつける。
黒いブーツの厚底と板がぶつかり、どん！　と音を立てて、木製の板が外れた。

「へぇ」

意外にも、手の込んだ石造りの階段だった。両脇の壁には何かしらの絵。
その絵と、この奥にいるらしい人間。
すぐに何のための地下か、想像が出来た。
――祭壇か。
嫌な光景だと思った。
人を供物にしても、神様なんて喜びもしないのに。
神様は、不幸を与えてほくそ笑むだけだ。

「気持ち悪い」

右腰のベルトに付属するポーチから、小型の懐中電灯を引っ張り出し、スイッチをオン。
暗かった階段とその奥は照らされ、足場を安定させる。

一段一段、歩きつつ考えた。
――この下にいる人間は、何を考えているんだろ。
絶望でもしているのだろうか。
それとも、心はとうに壊れているのだろうか。
どうでもいいか。
階段は、二十段ほどで終った。
扉は無く、すぐに広い空間へと繋がっている。
広さで言うなら一辺が二十メートルほどの正方形の空間。天井は高く、そして奥行きも中々。
俺のいる場所からすぐ真っ直ぐには鉄製の檻ががあって、その奥には二つの影があった。
ヒュウ、と口笛を吹いた。
そこにいたのは、図体が五メートルはあろうかという巨大な猪（異物）と、今にも喰われそうな、手と足を縛られた全裸の少女だった。

●

その少女は、目を布で隠され、口にも包帯が巻かれていて顔が見えなかった。
だが、その丸みを帯びた肩のラインや、ほっそりとした四肢に僅かにくびれのあるウエスト、しっかりと膨らみのある乳房やら、他にも色々と性別が女であると認めるのは容易な体だった。
猪は、鼻息を荒げて、その少女へと飛び掛らんとしている。
目を軽く動かす。見るのは猪（異物）。
これが、神様、ね。
笑わせるなぁ。
――異物（異端者区分民）を神と崇めた村、か。

ベルトにあるストラップから銃(ハンドガン)をパージ。
狙いを真っ直ぐ猪(異物)へ。
当然のようにその頭を狙い、

「さよ、ならっ」

撃つ。銃声が一つ、地下空間に木霊する。遊底(スライド)が自動で後退し、薬莢が排出され、次弾が自動装填される。金属の円筒は、軽い金属音とともに地に落ちた。
飛んだ銃弾は、真っ直ぐに飛び、檻と檻の間を潜り抜ける。音速は出ていた。それが真っ直ぐ猪(異物)の鼻辺りを直撃――、
はしなかった。猪(異物)がその長く太い牙で弾いたためだ。
ぶるぅぁぁあ！　的な鳴き声が聞こえ、苛立ったように体を揺さぶる猪。
舌打ちを一つ。
即座に敵戦力の計測。
――反応は普通。知能は無さそう。獣レベルの異物か。

決定、ザコ(ただの猪レベル)。

適当に判断しつつ、弾が無駄になったと内心ぼやく。
全裸の少女を、銃を構えながら見る。
音は聞こえるらしい。さっきの銃声で驚き、周りをキョロキョロと見回している。
動かないなら結構。
銃(ハンドガン)をストラップに。どうせ鉄柵のせいで、狙うには少し不利だ。
だから、――今度は刀。
左腰にぶら下がる三本の鞘の、一番短い、刃渡り五十センチ程度

の刀を左手で抜き出す。他の、刃渡り七十センチの刀と八十センチの刀は異物、もしくは龍殺しのための武装だ。対人用でもただの猪相手の武装でもない。対異物用といえば確かにそうだが、あれはそんな括りで縛っていいレベルの生き物じゃない。それに、対人用でも対異物用でもあんまり長いと小回りが利かなくて困る。

暗闇の空間、懐中電灯に僅かに照らされる世界の中、鞘から抜き出された刃はキラリと光り、鋭い剣先を見せた。

薄く黄色にそまる鋼の刀身。刃こぼれも錆も無い、美しい刀。握る柄はしっくりと手に馴染み、振るう腕はそれだけで歓喜によって動きやすくなる。

一歩、二歩、三歩。鉄柵の前まで来る。猪はまだ警戒の目でこちらを見ていた。

――すぐ、そっち行くから安心しろって。

「――喰龍つってさ」

説明する相手などいないが、気分の問題だ。

鉄策の間に、刀の切っ先を入れ、手首を回し、

「これ、異物の覇者である龍の、それも世界最古にして最強の“龍王”の腹から出てきたんだぜ？　――そんな刀が、ただの鉄に負けるわけないじゃん？」

横薙ぎに一閃。

それだけで、刃の範囲内の物質が全て切断された。まるで熱で鉄を溶かすかのように、物質が柔らかく切れていく。

鮮やかな切断面。

当然のように刃こぼれ一つ無い刃。

更に、返す動きでもう一回斜め下へと一閃。

鉄柵が鉄棒になって地面に落ちる。金属同士がぶつかる甲高い音

が何回かして、五月蝿いと思った。
三角の、入り口の完成だ。
よいしょっと、と、鉄策が突き出た地面を大またでまたぎ、奥へと入る。
猪は動かない。
しかし、

『……邪魔するな』

と口を動かし喋った。
俺は肩をすくめる。
――なんだ、知能あるじゃん。
異物の中では普通だが、こんなところに閉じ込められている奴がそんなものを持ち合わせているとは思わなかった。
まぁ、相手をしてくれるのなら俺も応じようか。

「んー、いやね？　邪魔なんてする気ないんだけどさ？　俺も仕事あるしぃ……」

『この娘は私の物だ！！』

「あらま、醜い独占欲ですことぉー……。それとも、種族の垣根を越えて獣姦ってか？」

気持ち悪ぃ、と呟く。猪は解りやすく憤慨した。鼻息を荒げ、こちらを睨む目は殺意がみなぎる。
――うわぁ、知能あっても馬鹿か。

『貴様ァ……』

言いながら、右前足は地面を蹴る。蹴って、走る準備をしていた。

「おいおい、俺は平和主義――」

者、と続くところで右腕が動く。

ストラップからパージ。照準は頭（ストライクゾーン）。当たり前に発射（ショット）。

一瞬で構えられたハンドガン。猪の挙動がアクションを起こす前にトリガーを押す。雷管をハンマーが打ち、火薬が発火。

パン。

一瞬で音速にまで持っていかれた銃弾は距離を縮め、命中（ストライク）とはならない。

撃った時点で足は前へと歩き、猪（異物）との距離が縮まっていく。残り六メートル。

残り四メートル。予想通り、その銃弾は猪（異物）の牙に弾かれる。

残り三メートル。猪が地面を蹴った。

残り二メートル。俺の左手が突きの構えを取る。

残り一メートル。俺の強く踏み込んだ足が前方へと飛ぶように跳ねる。

残り――、

「よっ」

ゼロ。

突進する猪（異物）の巨大な頭がすぐ目の前に。そして喰龍は、しっかり猪（異物）の眉間に。約三十センチ埋まっていた。

両者の動きが停止する。一秒、二秒。三秒目で、死亡を確認した

俺は、刀を抜いた。ぬめりある、湿っぽい音と共に抜き出すと、血が噴水のように溢れ出て、それが掛かる前に俺は横に――さっきよりも確実に速い速度で――飛び退いた。

どさりと音を立てて倒れる物体。その姿形は猪で、目と目の間、眉間に一つの、縦長の穴が出来ていた。

刀を数回振るう。刃に付着した血や脳漿（のうしょう）は、しゅわしゅわと泡と音を立てながら、まるで刀に吸い込まれるように消えて言った。

――便利だよなぁ。何しろ、胃腸機能の凝縮体だもんなぁ……。

それを確認してから、よし、と頷き鞘に収める。すると、伸ばしていた背筋がだるそうに丸まった。

「弱ェ……半端なく弱ェ……」

思わず脱力するほど弱かった。これなら村の住人のほうがマシだったんじゃないのか？

猪だもんな。

と納得して、今も体を動かさない少女の方へと歩く。

足音に、その少女の肩は震えた。そして、僅かに、じりじりと下がる体。

「あー、安心して安心して。別に悪い奴じゃないし」

人を殺しても悪い奴じゃないと言えるほど、俺も人でなしレベルが上がったようだ。

その少女はそれでももぞもぞ動く。

ため息を一つ吐いて、大股で近づいた。少女の体全体が一度、大きく震える。

とりあえず全裸相手に話しかけられるほど――いや別に仕事だしどうでもいいんだけど――俺は豪気じゃないので、自分の着ていた黒のコートを肩に掛けておく。まぁ、大事な部分が隠れた事で、大

分マシになった。
そして、『？　？　？』と首を右へ左へ曲げて肩に掛かった服の感触に疑問符を作っている少女の、目隠しと口周りの包帯を外す。
へぇ、と感嘆の声が出た。
僅かに日焼けした、薄い小麦色の、綺麗なハリのある艶肌。
髪の色は艶のある栗色。長く、背中をゆるりと流れている。
瞳は紫の宝玉（アメジスト）。
幼さ二割、大人っぽさ六割、その中間が二割といった感じの目鼻立ち。もっと言えば整った目鼻立ち。
髪型は耳上辺りの髪を後頭部で結う形。
ぶっちゃけ可愛かった。この少女が、依頼で言われた救出すべき人間か。
そして、

「……ば、化け物っ」

助けた人の股間を思いっきり蹴るという失礼極まりない行動をする輩だった。
おのれぇ。
と言った気もするが、とりあえずその場で絶叫する事にした。

●

「さよ、ならっ」

銃声が鳴り、体が思わず強張った。自分の身に何も無いと解った頃には、誰だろうか、と思った。
死ぬつもりなんだから、邪魔をしないで欲しいとも思った。
神様に食べられて、それで死ぬつもりだったのに。

ぶるぅぁぁああ！　という神様の鳴き声が聞こえ、次に舌打ちも聞こえる。
すると、シャァァァ、という、たぶん刃物を鞘などから取り出す時の音が聞こえた。
目隠しをされた視界の中では、何も見えない。
不安だけが募る。

「――ガリュウつってさ」

そんな軽薄そうな男の声が聞こえて、

「これ、異物の覇者である龍の、それも世界最古にして最強の“龍王”の腹から出てきたんだぜ？　――そんな刀が、ただの鉄に負けるわけないじゃん？」

長々と説明するその声のすぐ後に、金属がばらばらと落ちぶつかる音が聞こえた。
神様の声と、さっきの声の主。
一つの銃声。走る足音と、蹄のような音。
最後に、肉を突き刺すようで湿っぽい、ドサ、という音と軽い金属音の重なり。
倒れる何か。
そして、優しげに聞こえる男の声と、肩に掛かったコートのようなもの。
意味が解らず――いや、解りたくなくて――気を動転させていたら、目隠しが外れた。
外れた先には、にこにこ笑っている男がいた。
瞳は紅玉と呼んで差し支えないほどに鮮やかな紅色。とろりと光る目の表面は、潤っていて虹彩が光を多く取り入れているせいか、輝きを持っていた。

髪の色は明るすぎて白に近い白金色の金髪。何故か右こめかみを流れる部分のみ肘辺りまで伸びている。他は、男にしては長いと思える程度。
体は細く、黒いTシャツに黒のパンツ。右腰にはベルトのストラップにぶら下がる銃。左腰には三本の刀。他にも右腰のベルトにあるポーチにはナイフが一本。首には古そうな、十字架のあるシルバーネックレス。後ろには、腰からはみ出たショットガンがホルスターに納まっている。
にこーっ、と笑うその顔は、ほんわかしていて、後ろで額から血を流して死んでいる神様とは不釣合いだった。
思わず、その、神様を殺したというのに優しい、蕩けそうな笑みを浮かべていることに恐怖が走って、

「ば、化け物っ」

縛られている足で思いっきり股間を蹴った。
男は、笑みを眉を詰め、顔を青くしたものに変えると、

「おのびゃぁぁあ」

とか少し高い声で悲鳴をあげ、股間を押さえてその場で転がった。

“それはまるで悪夢のような”↓　夢だからと逃げるの？

「……」

「……」

背中に、一つのぬくもりがある。

さっきの少女だ。年は十五。名前はシルベ。シルベ　・　イルタリネ。

今は彼女の自宅だったらしい家――村長宅から服を引っ張り出して、来ている。薄手の、首元にレースの入った丈の短い黒のワンピース。こげ茶色の、フリルの付いたフレアスカート。薄いピンクと黒のストライプ柄のニーソックス。クリーム色のブーツに白のコートを着ている。

俺のコートは俺が今着ている。そして、村の入り口に置いておいたザックも、今は右手で握られている。

そして、少し遅い歩調で歩きつつ悩んだ。

（起きたらどうしようかね……）

確実に俺を恨むし憎むだろう。別に職業柄、そんなものは慣れている。問題は、依頼主のいる街までは歩きで三日と半日は掛かり、ここらへんは森と山で出来ていて車等の移動は不可能。仲が悪いままに移動していたらその内逃げられるんじゃないだろうか、と思っている。だからこそ、危惧しているのだ。関係が良好でなくとも、普通でいいのだからどうにかするべきだろう。まぁ、手足縛って運べばそれでいいんだろうけど、耳元で騒がれるのも面倒だし。

そう思わず考えてしまうほどには、仲は悪くなっていると思う。というか確実に悪いだろ。

何しろ、俺が仕事で助けに来たと告げただけで、

『そんな事しなくて結構ですっ！　か、神様を殺してっ、……この、このっ、罰当たりめ！』

と、顔を真っ赤にして怒られる。

『ははは。お嬢さん。いきなり男の股間を蹴っておいて罰当たりとは……鬼ですなぁ』

股間を押さえながら俺がにっこり笑って強引に連れ出したから良かったが。

だがまぁ、当然のように外には死体がゴロゴロ転がっていて、そんなわけでシルベは絶叫一つ上げて気絶した。自分の住んでいた村の人々が、頭を吹っ飛ばされたりただの肉塊になっていたりしたらそりゃ気絶もするか。俺が生まれた街だと日常の光景すぎるから、ただの風景として見れるのだけど。夏なんかはハエが集り蛆虫が沸き、冬は凍えて血も凍っていて、春はやっぱり虫が沸く。死体を見すぎて育ってるから『おお、春ですなぁ』とか虫のわき具合を見て判断できる。自慢じゃないけど。

マ、マジで自慢じゃないんだからね！？

気絶してなかなか目覚めないもんだから、面倒だったが仕方なく今はおぶっている。体は細くて痩せているのに、やっぱり人間は重い。

四十……二、三程度だろうか。背丈は百六十五程度だし、普通か痩せているのどっちかだろう。肥満体型ではないのは、さっきの全裸で把握済みである。

今は村を出て、森を真っ直ぐ突っ切っている。名も無い、ただの

森だ。
背中からおぶる体が落ちないように、僅かに体を前に倒しつつ、呟く。
「にしても、珍しいよな……俺に人助けの、依頼なんてさ」
誰か反応してくれねぇかな、とか思う。
実際、珍しかった。
依頼は街を数週間から二ヶ月ほどうろつき、俺を知っている奴があっちから話しかけてくる。職業が殺しも厭わないようなものなので、自分から看板ぶら下げて宣伝するわけにもいかない。そして、そういうタイプが多く、今回もそうだった。
ただ、問題があるとすれば、――それが街の市長だったことか。
積まれた金は結構な量だったし、それに見合うだけの人数が殺せそうだった。請け負ったらあの市長、『君、ホントに子どもかい？』とか言いやがった。
ガキじゃねーっつの。
俺の今の年齢は、外見年齢だけで見たら十八程度。実際年齢は十七だが、若作りな顔という設定で二十歳にしている。そうしないとナメられるからだ。ちなみに名前はアルファ。アルファ・アリィ。この仕事は九歳からやっている。
やらなければ、死ぬだけの世界だったから、嫌でも銃の扱いくらいは覚えた。
「荒廃街、か……。あそこは、地獄だったなぁ……」
俺の故郷のあだ名だ。
その名の通り、荒廃して、人の住める土地ではない場所。そんな土地を強引に開拓して、生きるには不適切な場所に街を作った、らしい。

この大陸を西に真っ直ぐ行って、その端にある、大きな石と乾いた土しかない土地にある街だった。
物資が少なく、人殺しばかりの街。崇めたのは太古の龍王（ドラゴンタイプ）。当然、異端者区分民。
最悪の思い出しかない。友人がいきなり裏切って俺にナイフを向けたり、幼馴染だと思った奴は俺を殺そうとしたり、ほんとにもう最悪の思い出ばかりだ。親父は母さんを俺の目の前で殺してヘラヘラ笑ったし、しかもその肉を喰った。

美味い美味い。女の肉は柔らかくて美味い。ほれアルファ、お前も喰えよ。

ゾッとする程、狂った光を宿す目が俺を見て、母さんだった何かを俺に差し出した。その何かは、ぶよぶよとした赤黒い肉の塊で、表面には小麦色の母さんのものらしき肌が浮かび、筋肉の繊維、血の赤、脂肪のぬめっとしたものまで見えた。
そして狂っているのだと思った。
この親父はもう駄目だ。昔から狂っていたけど、もう本当に駄目だ。そう思うとなんだか心が楽になって、そして俺は親父を撃ち殺した。初めての殺人だった。
昔は、いくらカニバリズムで狂っていても、幸せそうに笑う親父だったのにさ。
自分も、腹が減っていたからと喰った時点で、終っている。母さんだったものは、血の味しかしなくて不味かった。親父だったものは血の味も薄くてゴムを噛んでるようで、もっと不味かった。
腹が減っていた。というのは、良い言い訳だろうか。
だが、喰わなければ飢餓で死んでいた。だから、食べた。不味くても胃に詰め込めば何も変わらないと、そう思い込む事にして。

責任転嫁になるが、全部、あの土地が悪いのだろう。枯れて痩せた、あの土地が。
それに比べたら、
「ここら辺は、いい感じに潤ってますねー……。綺麗な川もあるし、木の実も多いし緑も濃い。あそこも、これくらいに潤ってたら、皆仲良く出来たのかね……」

ぶっ壊れちまえばいいのに、こんな緑。
皆殺しあって、さっさと淘汰されればいいのに。
憎んでも、恨んでも、どうせ俺にはこうやって人を殺して、出来るだけ早く人の世界が終わるのを待つだけだ。
何にも出来ない。
十人殺しても、百人子供が生まれて。
百人殺しても、幸せそうに笑う家族が何十万といやがる。
全員、死んでしまえばいいのに。
どうせ、無理だろうけど。

そんな事をできる力が、無いのだから。

足りないのだ。まだまったく、足りない。大量虐殺なんか出来ないし、だからチマチマ刀を振るって引き金を引くしかない。
だから、まだ無理。
無理だと解っている自分が、一番腹が立った。
――あー、もう！　イライラすんなぁ！
内心苛立ちつつ、頭をガリガリと掻きたいのに両手はシルベの太ももを支えている。
思わず引き千切りたくなったが、仕事だ。

仕事仕事……、と何回か呟くと、どうにか苛立ちや怒りや恨みといった負の感情は落ち着いた。
金がないと、生きていけないんだ。
死にたくはない。まだ、死ぬ気はない。
だから、生きるために、世界から人を撲滅するために殺さないといけない。
殺して殺して、殺してまた殺して……その内、人が全員いなくなったら、きっと俺は死んでもいいと思える、筈だ。
それまでは、まだ。
思考がいつものように暗くなって、太ももを握る手に力が篭ったとき、

「ん……」

と、小さな声とともに、背中におぶさる少女が声を上げた。
そして、

「んぅ……？」

と可愛らしく小首でも傾げていそうな疑問の声が出て、すぐに、

「へ！？」

と驚愕の声になった。
耳元で叫ばれた俺は顔を顰めつつ言う。

「起きた？　はい、お目覚めついでに問題でーす。ここはどこでしょう？」

「え、あっ、え、え、えー……森？」

戸惑いながらも律儀に言葉を返すシルベ。困惑しているからだろうか。

「正解です！　……あ、そうそう。シルベさん、歩ける？」

無邪気にテンションを上げて受け答えし、尋ねる。シルベは割りと律儀に、もしくは状況を受け止められないのか、「は、はぁ……まぁ」と言った。

「そっか。――んじゃあまだこのままだね」

へ？　という少し間抜けな声が返ってきて、そしてすぐに暴れだした。主に髪を引っ掴まれたり首を叩かれたり背中を殴られたりする。髪が、ブチッ、と嫌に耳障りな音を立てて五本くらい抜けた気がした。痛かった。他は大して痛くなかった。ははは可愛らしい女の子の殴りじゃねえか頭痛いんだけどどうしてくれようか！？　とか軽く笑みが生まれるくらいには可愛らしかった。ここは怒るべきだろうか？　怒るべきか。

よし、俺怒っちゃう。

「――やめんか馬鹿！　一体俺の背中で何やってやがりますか！？　俺が貴様の太ももを握っていると言う事実は変わらないのが解らないのかね！？」

語尾がおっさんになったり後輩になったり偉い人になったりしながら、テキトーにキレる。

すると、背中のおぶられる少女はビクッ、と体を震わせて、だがすぐに、

「は、離してっ！　離してくださいっ！　何なんですか貴方は！！か、勝手に神様を殺して……！　私は死ぬつもりだったのに！」

威勢良く叫びだした。髪は抜かれたりもしないけど、耳元で叫ばれて五月蠅い事この上ない。

やれやれと思いながら、口を開いた。

「いや、シルベさんに死なれると困る人がいるそうなんだよ。セルク街、知ってる？　そこの市長さんの依頼でね」

面倒そうに、背中で暴れる少女に、諭すようにゆっくり説明する。やはり降ろさなくて良かったな、と思った。降ろしたら今すぐ走って村へと戻りそうな勢いだ。逃げられると面倒。追いかける体力なんて使いたくないし、威嚇用に銃弾を使うなんて馬鹿らしい。面倒ごとは嫌いだ。

すると、さっきまでギャーギャーと五月蠅かった声色は、確実に弱々しく驚愕する声音に変わる。

「……セルク街の市長……！？　な、何であの人……」

「あー、なんか因縁っぽいのでもあんの？　いや、聞いたら面倒なことに首突っ込む事になるだろうから聞かないけど、ともかくこれ、依頼だからさ。うん、だからこのままでいいよね？　俺、疲れないし」

「はぁっ！？　いやです！　さっさと降ろしてください！」

「えー。いや、どうせ村に戻るでしょ？」

「当たり前です！」

「それじゃ俺、前金しか貰えないじゃんか……」

「そんなの知りません！」

「むぅ……じゃあ、飴玉上げるから、それじゃ駄目？　イチゴ味とレモン味のどっちがいい？　――ハッ！　ま、まさか俺の大好きなグレープ味がいいだなんて言わないよね！？」

「馬鹿にしてるんですかっ！？」

「んー……じゃあ、お金？　一応預金通帳はあるけどぉ……どうだろ？　適当に預金はしてるけど、数えた事も無いしねぇ」

「なっ、殴りますよ！？」

「じゃあ、何がいいのさ。お金と甘いものと服以外に女が好きなものなんてあるの？　それとも肉派？　ＬＯＶＥとか言ったら鼻で笑うよ？」

「いいから降ろして！　早く！　皆、皆が！」

「だぁーかーらぁ――……その皆は死んだって。肉の塊か醜い芋虫みたいになってると思うけど」

「そ、そんなのは……ッ……、嘘、です！」

「マジマジ。俺がヤッちゃったし」

「んなっ……！　う、嘘！　皆、死んでなんかいない！！　生きて

いるはずですっ！」

適当に言葉のキャッチボールをしていたら、更に暴れだす。

うるせー、と思いながら無視していると、その手が首にぶら下がるシルバーネックレスに触れた。何故か一瞬つかみ、強く引っ張った。

軽く苛立った。勝手に触るな。

大事なものなんだよ。

――ああもう。

これだから人間は。

たかだか人の数十人が死んだ程度で騒ぎやがって。

死んでなんかいない？　生きているはずだ？

無理無理。

頭部破損（ヘッドショット）、心臓破裂（クリティカルショット）、四肢（ダルマ）の切断、頭部（首なし）の胴体解脱。これで人が生きてると思うのか？

馬鹿じゃねーの。

そんなもの、日和見主義者の現実からの逃避だっつーの。

人は死ぬし、生きたくて何かを殺す。豚かもしれないし牛かもしれない鶏かもしれないし魚かもしれない。

でもな。

それに人だって該当するって、何故分からないんだ？

世の中には人の肉を食べるカニバリズムとかいう狂った輩もいるし、そもそもこの世界は格差社会だ。富あるものは人を見下せるだけの力を持ち、下に居座る人間はその場所で得られる幸福を得るしかない。資本主義とか言うシステムで世の中が動いている以上、金持ちは同類を“食い物”にしている。

それも解らないの？　馬鹿？　それとも死ぬ？　同じただの肉にでもなってみる？
無知で、それも解らないくらいには幸せな人間だということに苛立ちが募り、苛立ちは殺意に変貌する。

だが、仕事だ。

そう思って殺すための腕が止まる自分に、また苛立ち。
力があれば、こんな事で戸惑いはしないのに。
力が、欲しい。だけど手に入らない。
渇望できるだけの権利も道具も既に持っているのに、何故。
手に入らないのが意味不明だ。
思考がぐるぐると同じ場所を回転し、答えの見つからない無限迷路に迷い込む。
ああ。
本当に、色々と、面倒くさい。

「チッ」

太股を軽く掴んでいた手を離す。
俺から仰け反るようにして背を伸ばしていたシルベが、「わっ、わ！？」と言いながら地面に腰から落ちた。ドサっ、と重いものが落ちる音が聞こえる。
同時に、俺も後ろを向く。
ストラップからパージ。照準は頭（ストライクゾーン）。当たり前に発射（ショット）、はしない。
別に撃ってもいいけど、これ仕事だしなぁ。
そんな理由で人殺しを止める自分に、今度は怒りを通り越して呆れのため息が出る。出してから、銃口を向けた。

「あのさ、シルベさんや。ちょっと静かに聞いてくれると助かるんだけどさ？」

「ひ……」

銃口を向けられて、完全に硬直するシルベ。瞳は大きく見開かれ、小さく震えている。目の前にある銃口から目を逸らそうとしているみたいだ。唇も同じように震えていた。

怖がっていると、はっきり分かった。

思わず目が細まる。視線は確実に軽蔑のそれに変わり、思う言葉は心の中でのみ反響させた。

死ぬつもりじゃ、無かったの？

君の覚悟なんてその程度か。

まぁ、どうでもいいけど。

しりもちをついた姿勢のまま動かないシルベに、半歩近づき、腰を落とす。肩膝を立てた姿勢になった。銃口は、その眉間に押し付けた。

にっこり笑っておく。嗜虐的な笑みかもしれないし、聖母の愛情ある笑みかもしれない。

そんなもの、見るものによっては表裏一体なんだから。

「俺さ、九歳の頃からこんな事やってるんだけどさ？　うーん……想像付かないだろうけど、俺からすれば、人を殺すことなんてホント些細な事なの。ね？　解らないよね？　君、幸せそうだもん。幸せそうに死ねるんだから、割と羨ましかったりするんだけどさぁ…

…。

ああ。で、話を戻すけどね？　うん、こうやって俺がグリップ握ってトリガー引けば、君、死ぬよ？」

「……あ、ぁあ」

意味不明なうめき声を上げるシルベ。完全に恐慌していた。

「トリガー引いて撃鉄（ハンマー）が雷管打って火薬が発火して、音速で飛ぶ鉛弾が君の眉間を貫いて脳に風穴を開けるのはどれくらいの時間がいるんだろうね？　一秒は確実にいらないと思うよ？　まぁそんな事すると俺、依頼失敗するけど」

でも正直さぁ。

「依頼だからって人を助けるなんて、ちょっとイライラが募って駄目になっちゃいそうでさぁ。俺のスタンスが依頼で殺すべき人間の家族も殺す、とかそういう感じだからなんだけどもね？　……まぁ、そんなわけだから、俺、撃っちゃってもいいかなー、なーんて思うわけですよ。で、君、そうなると死ぬよ？　死にたい？」

ねぇ、どうなのさ。

聞くと、その小さな頭は、目尻に涙を溜めながらも、動かない。ただ、小刻みに動く体が全てを物語っていた。

ため息を一つ。

「まぁ、君も見たとおり、君の住んでいた村の住人は、男女爺婆（おとこおんなじいばばあ）含めて俺が全部殺した。子供はいなかったね。でも子供がいたとしても撃つよ？　……んー、何人くらいいたかな？　たぶん三十人以上はいたよね？　うん、全部殺したよ？　依頼だったし。そもそも俺

の願いでもあるし」

目が、更に見開かれる。アメジストの輝きは、涙で潤い光を増していた。

よくそんな開けられるねぇ、と心の中で感心しつつ口を動かす。

「だからさー、別に、女子供家族友人恋人幼馴染その他全員、……自分の関係者だからって殺さないなんて馬鹿みたいな事は言わないの、俺。

殺すときがくれば殺す。誰でもね。俺が一番最初に殺したの、親父だし。その親父も、俺の目の前で母さんを撃ち殺したりしてるしね」

「……ッ！」

息を呑む音が聞こえた。

よくある、一般人の反応だ。たまに怒る輩もいるから困る。

「悪いけど、俺ちょっと頭の中狂っててさ、世間一般の常識じゃ『キチガイ』とか『病気』（精神異常者）とか『殺人鬼』って呼ばれる部類の人間なんだよねぇ。あ、サイコパスじゃないよ？　あそこまで狂ってないから。ロジックは持ってるし、一応自分の中の善悪論に基づいて行動してさぁ。別に自分が正義（ヒーロー）の味方だなんて思わないけど、ともかく全人類が悪だと思うから殺してる《・・・・》だけだし。

……だから、さ？」

きっと傍から見たら、俺の顔はにこーっ、とした笑みがあるだろう。だから俺は“笑う蹂躙人形（ナイトメア）”とか呼ばれたりするのだ。

人を殺せば、世界を救う（人類を抹殺する）夢に一歩近づくのだ。

こんなに嬉しい事、あるか？

「ちょっと黙って付いてきてくれないかな？」
銃を眉間から外し、安全装置を元に戻してストラップに付ける。
銃が腰辺りで揺れた。
視線を戻して、シルベの顔を見た。
すると、――シルベは、俺をなみだ目で睨んでいた。

「……わ、私は」

声は震えて、顔全体も小さくプルプル震えている。
でも、眼力だけは強い。意志の光は鋭くなり、力を蓄えていく。
「私は、死ぬ覚悟、です……そんな、っ、の……知りませんっ。あ、貴方がいくら人を殺そうと、私は、死ぬ覚悟でした」

「……」

俺が、無表情に無言でシルベを見ていると、シルベはそれを押し黙ったと思ったらしい。唇を震わせて、一度下唇を噛んで、目を、ぎゅっ、と閉じてまた開いて、眉を立てて言った。
覚悟かもしれない。
死ぬ覚悟かもしれない。
だけど。
くだらねぇ。
異物に上げる命なんか、俺が全部撃ち殺すか切り殺してやろうか。
「貴方は、神様を……何だと、思っているんですか？　……あれは、神様は！　あの辺り周辺の地域の土に栄養を巡らせ、そして肥やしてくれる、立派な神様でした……ッ！　なのに、貴方は……！　貴

方みたいな人のせい――」

「で？　それでアンタはあんな異物に犯されて食われたかったって？　猪なんかと交わって何がしたいの？」

出た言葉は刃だった。

それがシルベの喋る口に、考える脳に、聞く耳に切り込み、動けなくする。

人間一人の視野は狭い。

だから、事実のみを言われたら、主観で物を見る人間は、黙るしかなくなる。

客観は時に正論で、時に残酷な刃になるのだから。

「言っとくけどね、これは俺の感想じゃない、客観的な事実だけだ。傍から見たら、あんなの、……はッ」鼻で笑う。そして、「――ただの獣姦だ。そうとしか言い様が無い。そして、君を喰うつもりだった。……教えておくよ、シルベ」

シルベは無言。

自分の身に起きるべき事実が、他者の、しかも恨むべき存在に言われた事で、何も言えないようだった。

「――神様なんて奴は、不幸しか与えない。じゃなきゃ、世界中に生態系の正当な進化から外れた異物が生まれるわけが無い。

これは俺の自論だけどね。進化って言うのは、環境への適応の繰り返しだと思うんだよ。虫が、人の作り上げた殺虫スプレーに対抗できるようになったり。人が、それぞれの土地の気候に合わせて肌の色や体格、内臓器官の効能の強弱を変えるように、ね。なのにおかしいよねぇ？　体長五メートルの猪なんて、聞いたことが無いよ俺」

知ってるか？

「龍なんてフザけた、空想上のファンタジーの産物までこの世には存在してるんだよ。体長は最低でも五メートル。デカい奴は俺が見た中では最高五百メートル超。翼を持ったタイプに地を這うタイプ。口から吐かれる火は摂氏二百度以上がザラ。尻尾は一撃で山を砕いたりする。その咆哮で鼓膜が破れたり、衝撃で吹っ飛んで気がついたら肋骨の二、三本は折れてるさ」

またため息が出る。今日は、疲れそうな一日だ。

立ち上がる。

「まぁ、どうせあと数日の仲だし、どうでもいいっちゃ、どうでもいいんだけどね」

ほれ、と手を差し出した。

「立てる？」

その目は、虚空を見ていた。

空ろな瞳は見開かれたまま、小刻みに振動しつつ、目尻から涙を流した。

●

パチパチと、薪が火で燃え、爆ぜた音を小さく鳴らす。目が僅かに、火の熱で熱く、このままだと乾燥した目が生理的な涙で潤わそうとしそうだった。

泣いているだなんて思われたくなくて、だから自然な動きで目を逸らし、周りの景色を見た。

右の方の森の木々は、黒に染まり、光を反射する活気ある緑から、闇に誘うような危険な雰囲気を醸し出していた。

左では、緩やかに流れる川の清流がサラサラと音を立てつつ、焚き火の光を水面に映させる。

空は満点の星空が瞬き、いつものように綺麗な光の粒を視界に納め、歩きつかれた足を癒してくれた。

夜だった。

私は、あれから一言も口を聞けずに、俯きつつ、足を踏み外してこけそうになった所を必要も無いのに助けてもらったり、食料を分けてもらったり、ただ歩いていた。

気がついたら夜で、アルファさんは薪を集めていて、川の近くで火を起こしていた。

私は、その暗い夜闇の中で光る暖かさを、頬や体育座りの体の前面で感じつつ、ただぼぅっと言葉を脳内で反芻していた。

『――で？　それでアンタはあんな異物に犯されて食われたかったって？　猪なんかと交わって何がしたいの？』

思わず、下唇を噛んだ。

悔しいが、事実だ。

そのつもりだったし、村ではそういうものだと、諦めの空気も漂っていた。

――だけど。

それでも、あの土地は土が栄養豊富で、麦は健康に大きく育ったのだ。
それを、全部メチャクチャにされた。
たった一人の、まだ二十歳にもなっていないだろう人に。

「ほれ、食べなー」

いきなり、手が伸びてきた。男にしては白い肌、細い腕。――アルファさんのものだ。その手には、焼いたらしい魚が串に刺さっている。

「……ありがとう御座います。アルファさん」

受け取ると、

「これとこれもどーぞ」

切られたパンと、水筒を渡された。それも受け取る。

「どういたしまして」

お腹は空いていた。小さく動かした口で食んだ焼き魚の身は塩が振られていて、脂も乗っていて美味しかった。自然と、食べ物に感謝の感情と美味しいとい思いで心が安らぎ、微笑みが生まれた。水筒の中身を飲むと、澄んだ冷たい水が入っていて、一日中歩いていた体に染み渡るようだった。パンは普通だった。
何故、さん付けするのかなんて知らない。生まれつき、周りは大人だけだったからそうだというのもある。
だけど、それ以外で自分でも解っている理由があるとしたら、認めたくなんか無いけど、

――命を、助けて貰ったから。
死ぬつもりだった命を助けられて、それでも感謝している節がある自分に、悔しさで胸中が一杯になり、顔をうつむかせる。視界に、光に彩られた栗色の髪が移った。
と、
「美味しそうに食べるね、シルベさんは」
顔を上げると、微笑みつつこちらを見る、白金色の髪と紅玉のような瞳を持った青年が、こちらを見ていた。紅の瞳に炎の揺らめきが加算され、本当に燃えているようだ。
ジトッ、と上目遣いに睨み、言う。
「……さん付けとか、敬語とか、止めてください。……聞いてて、イライラします……」
「あ、そう？　じゃあシルベ、美味しい？」
コクン、と小さく顎を上下させた。実際、美味しかった。
クスクスと笑う声が聞こえる。薪が投げられて、火が一瞬強く揺れた。
「いいね、そういうの。うん、食べて美味しいって言って、美味しそうに微笑む人はきっといい人だよ」
食べ物は大事にしないとねー、と嬉しそうに目を弓にして笑う姿は、外見年齢よりも若く見え、無邪気な子供のようだった。
――なんなんだろう、この人。
違和感を感じる。いや、もっと言えば意味が解らない。
日中、銃を眉間に押し付けた相手に対して、ここまでフレンドリ

ーに話しかけられる理由が解らない。

頭おかしいんじゃないだろうか。

いや、きっとおかしい。

あれだけの人数を殺しても、ケラケラ笑うだけだ。自分より巨大な生物を、神様を見ても、にこーっ、と笑うだけだ。

おかしい。キチガイだ。殺しすぎて頭がパーになってるんだ。絶対そう、そうよ。というか、自分で言ってたし。

ぱく、ぱく、と口を動かして焼き魚を食べつつ、思った。あ、内臓食べちゃった。苦(にが)ぁ……。だが、吐き出すとまた笑われそうで嫌だったから、眉を顰めながらも飲み込んだ。すぐに腹の部分を食べる。そして水を飲んで、パンを口に放り込んだ。やはりパンは普通の味だった。

そのまましばらく、魚を食べて、パンを食べて、水を飲んでを繰り返す。元々あまり食べないので、すぐにお腹は満足になった。余ったパンと水筒をアルファさんに返しておく。

ほぅ、と息を吐き出してから、夜空を見上げた。

「綺麗……」

自分の今の境遇や、村の皆の状況など考えずに、自然と言葉は漏れた。感嘆の声だった。

満天の星空だ。

光が断続的に瞬き、夜空の天井を白い光で埋め尽くそうとしている。この周囲一帯は工場等も無く、森と山が広がるだけなので、相当に空気が澄んでいる。そのおかげで、このように煌々と輝く美しい夜空を見られるのだ。ただ星座についての知識は無いので、綺麗

と思うだけだけど。
この星空も、夏になれば運河が出来る。
綺麗だったなぁ。村の皆でお餅をついて、食べながら見てたっけ。
いつもは早寝を厳命されているけど、あの日だけは許されていたんだよね。
……綺麗、だったなぁ。
もう一度、皆と見たい。
微笑む顔。笑う顔。ガハハ、という豪快な笑顔。皆笑顔だった。
思い出の中はモノクロで、僅かにぼやけて靄(もや)に包まれていた。
――会いたいですよ。
だが、――もう会えないのだ。
皆、死んでしまった。
怒りは、夜空を見て、過去を回想することで掻き消えた。今は、怒りたくなかった。

「だねぇ」

前方から、同じような感嘆混じりの声が聞こえた。僅かに苛立ちと殺意を覚えたが、今は忘れる事にした。
しばらくはそうやって星空を見上げていたが、いい加減に首が痛くなってきたのと、隅々まで見てしまったことで飽きが回ってきて、視線を前に戻した。アルファさんはまだ夜空を眺めていた。両手を腰の後ろに付けて、上半身を斜めにした姿勢だ。
視界には、アルファさんの足が見え、その黒いブーツが見えた。艶のあるエナメル質のブーツは、光で陰影を濃くし、ゆらゆらと輝く。
そのパンツは黒。Tシャツも黒。その上のロングコートも黒。
真っ黒だ。今は炎で照らされ、その白い頬や、その頬に灯る僅かな赤み、そして目の紅に白金の髪と一緒に服装も照らされているが、火が消えたら判別が付かないかもしれない。寝ているところを、襲

われないようにしようと思わず考え――。

「――ん？　どうかした？」

じっと見つめていたらしく、アルファさんがこちらの視線に気付いてキョトン、と首を傾げている。その右の長い房が優しく揺れた。

「あっ、い、いえ……なんでも」

慌てて否定すると、おかしそうに笑うアルファさん。笑うところだろうか。というか、何故笑えるのだろうか。

聞いてみたくなった。

疑問が興味を呼び、その顔をチラチラと伺い見る。

線の細い、中性的な顔だ。瞳は大きくも小さくも細くも無く、丁度良い。ただ、はっきりと自己主張する二重瞼で、――意外にも睫毛が長かった。だから、紅の瞳の印象が濃くなる。

鼻筋も綺麗だし、肌は白磁の陶器のように滑らかで白い。頬肉はふっくらとしていて、流麗な顎のラインに乗っかって柔らかそうだった。唇は血色良く、形も良くて、笑みを刻みやすそうに柔軟な動きがよく見える。

背丈は大体百八十程度だろうか？　足は背丈に見合って長く、腕もそれなり。体も細い。まるで、バランスを丁寧に整えながら肉体が成長したみたいだ。

四肢は細く、腕を見ても解るが筋肉などあまり無いように見える。正直、銃を撃つような体格には見えない。だが、確かに銃の腕前は日中の早撃ちで見ている。それに、今も帯刀している刀は、三本もある。腰には銃口の短いショットガン。腰のベルトからぶら下がるストラップには、銀細工の美しいハンドガン。それに小さいながら中身のぎっしり詰まったポーチ。色々入ってるらしいザックもある。ひょろそうな体のどこにこれだけの物を持ち運ぶ力があるのだろう

か。
　でも、もしも、違う出会い方だったら惚れてただろうな、と思うくらいには整った顔だ。特に紅玉の瞳は、見るものを圧倒させる。その白金色の髪も日焼けしていなさそうな肌を邪魔せず、目の紅を引き立てている。普通の出会いで初対面だったら、強烈すぎて絶対に忘れないだろうと思う。
　出会いが最悪でそんなことどうでもいいが。それに、どうせ後数日の仲だ。
　すると、

「あー、俺の顔、なんか付いてる？」

　再度、首が傾げられて、更に私の心臓が跳ねた。やってしまった！
　焦って思わず焼き魚の刺さる串を落としそうになって、慌てて空中でキャッチ。
　私のキョドった行動を見たアルファさんは「あはは」と笑った。悔しいが、今のは笑うべきシーンだった。
　そして、焼き魚の串をしっかり持ちながら、炎越しのアルファさんを見た。

「……何で、いっつも笑ってるんですか？」

　アルファさんは、私の意を決した質問に、んー、と眉根を詰めて苦笑の表情を作る。また笑った。
　笑って笑って笑って、笑ってばかり。怒ったり、憎んだりできるのだろうか。

「俺、別に笑いたくて笑ってるわけじゃないんだけどね」

「私……そんなにおかしいですか」

「あ。いやいや、そういうわけじゃないから。……俺の両親がさ、笑ってばっかの人達だったから。俺も、自然と笑う表情が板に付いたんだよ」

それに、とその口は動く。

やはり笑みのまま。

「世の中全部、クソみたいに腐って見えると、呆れを通り越して笑えてくるんだよねー」

いきなり“クソ”などと言う、汚い言葉使いが混ざって、肩が小さく震えた。

そういえば、たまにこうやって黒い部分が見え隠れする性格だったと、日中の出来事を思い出す。

本当は、どっちが本心なのだろうか。黒い部分か、今みたいに笑う部分か。

「それが、笑う、理由ですか？」

「あー……どうなんだろうね」体育座りになって、炎を覗き込むように背を丸めると、「俺、嬉しいとか面白いとか、楽しいとかの感情の類は壊死してるから。小さい頃に、人の醜い部分を見すぎて、心が不感症になっちゃってね。でも、苛立ちとか怒りとかは結構感じるんだよねぇ……」

「そんな訳……いや、というか中二病臭いですよ、その言葉」

ポツリと言った言葉に、私は思わず否定しかけた。

――そんなの。

違う。この世に、心が死んでいる人間なんかいない。みんな笑って泣いて、怒って悲しんで、そうして心に傷を負っていって、そしたらそんな風に褪せたようになるだけだ。だから、誰も彼も、心が死ぬわけが無い。

と、言いたかったが、気恥ずかしくて言えなかった。他人に言うと確実に笑われると思う。特に、アルファさんに笑われるとなんだか無性に腹が立つ。

憎んでいるのだから、当然か。

憎い人間に、死ねと思うのは当たり前なんだから。

思う眼前、アルファさんは「そうかもね」と悲しそうに笑った。

「……本当に笑ってばっかですね」

「まぁ、笑わないと、頭の中狂いそうになるような体験しかしてないからね」

どんな？　とは、聞いてみたくもあった。

だが、聞く前に。

「――俺のこと、憎い？」

笑みは、そんな言葉を吐いた。

そして、忘れようとしていた、皆の、脳漿のピンクや、血の赤、肉のスライムのような物の一部を思い出してしまった。

肩も喉も目も口も全部震える。ガタガタと、ふるふると、ぶるぶると、カチカチと、寒いとでも言うように。

実際、心は押し固めたように寒さを生み出し、火の暖かさを無視するように過去の映像から目を背けていた。

喉は震えながらも、それでも押し殺したような言葉を出せた。

「……当たり前じゃないですか」

拳を握る。強く。強く。

皮膚に爪が食い込み、僅かな痛みを発生させた。

「だよねー。じゃあ、殺したい？」

いつものように、暖かみを持った、にこーっとした笑みは平然と言う。絶対、狂ってる。

挑発してるのか？

そう思うと、歯軋りが自然と鳴った。

苛立ちや馬鹿にされたという事実、他にも様々な黒い感情が、叫ぶ。

殺したい。

皆を殺したように、苦しませて殺したい。

死ね！　死ね！　死ね！　お前なんかが生きてるから！　お前みたいなのがいるから！！

だが、叫んだところで、無理だ。私は貧弱で、力もあまり無い。それに、さっきみたいに銃を押し付けられるのはもう嫌だった。

必死に叫びそうになる衝動を我慢し、体を硬直させて火を睨む。

それを見たアルファさんは、口端を、にぃっ、と上に上げる。狐が人を化かす様な笑みだった。焚き火も、表情を際立たせる。

明らかな嗜虐の笑みだ。

「……じゃあさぁー、ほれ、これで撃てば？」

焚き火の上を放物線を描いて、投げ渡されたのは、腰のストラップにぶら下がっていた、綺麗な銀細工の筋が起伏を生むハンドガン。高価なものだと解る。

慌てて、体で包み込むようにキャッチ。ずっしりとした重みと、

鉄の冷たさが背筋を冷たくした。
重い。こんな、普通のサイズのハンドガンが、酷く重い。
この、銃の、トリガー。それを引けば、銃弾が吐き出され、それが飛べば、血が出る。
痛い。
怖い。
人殺しの道具が、自分の手に、ある。
すると、いつの間にか隣に立っているアルファさんが、銃の持ち方を教え始める。
ここはこう。
そこは、そうして。
ああ、そんな感じ。
そして、カチコチに硬直して動かない指先を、白い指がゆっくりと熱で解くようにして動かし、勝手に握らされる。
私は、気付くと、銃を握る両手を優しく、アルファさんの両手に包み込まれ、その銃口は彼の心臓を狙っていた。
腰が引けて、体が引いている私。いつまでも笑ってばかりの、銃口が押し付けられても笑っているアルファさん。

「……うん、こんな感じだね。さて、撃つ？」

口は、震えていた。
既に銃に触ることが、トラウマになっているのだと気付いた。
銃口を日中に、眉間に押し付けられた冷たさ。覚えてる。それ以前に、あの村にもあった。人殺しの道具。皆、守るためだと言った。何に？　聞くと皆、君をだよ、と笑った。違う。嘘。嘘。そんなの嘘。だって、重い。これ、重い。凄い怖い。命が目の前にある。それが、トリガー、引くだけで死ぬ。血が溢れて、皆、アルシャさん、ヨクトさん、イスキュルさん、他にも、い、一杯、一杯、変な形の皆になる。何も守ってない。守らない。殺すだけ。殺して醜い人じ

ゃない何かになるだけ。嫌。嫌。嫌！　嫌、そんなの嫌！！　殺したくない。死にたくない。私はまだ死にたくない。あんな死に方嫌。普通に死にたい。

普通？

私は、食べられて、犯されて死ぬんじゃなかったのか。供物として捧げられて、死ぬのではなかったのか。
それが普通なのか？
それは。
そんなのは。
違――、

「あ……」

ぁあ。
ああぁあ！
違う！　否定なんかしていない！

「……嫌ぁ……そんなの、違うよぉ……」

認めてなんかいない。

「違うのぉ……そんなの、ッ、……違う……私は、覚悟、してたんだよぉ……」

涙が零れ落ち、その温さが体の硬直を溶かした。
柔らかく、体のどこもかしこもおかしくなっていく。

涙がこぼれて、喉が震えて、肩は大きく上下して、しゃっくりも出て。唇が歪む。頬が歪む。眉が歪む。視界も歪む。

何もかもが歪む中、紅の滲んだ瞳は、何もせず淡々と無表情だった。

憐れみでも、嘲りでも、馬鹿にするでもなく、ただただ無表情だ。

その、私の手を包んでいた両手はゆっくりと解かれた。私はその機を逃さず、手からすべり落とすように離した。握っていたくなかった。握っていたら、自分の弱い何かが丸見えになる気がして、嫌だった。

死も覚悟していたはずの自分がただのハリボテで、死にたくないと願うただの人間だったなんて、気付きたくなかった。

「……シルベは、弱いね。憎んでる相手一人、撃てやしない」

言葉は鋭利なピックとなって私の、何か大事な部分を貫く。

耳を塞ぎたい。聞きたくない。

腕は、銃を構えた形から硬直し続けている。動かない。

弱くなんかない！　私は、弱くなんかない！　絶対！　絶対そう！　皆、強いって言ってたんだから！

必死に叫ぶ心は、意味を成さずにぼろぼろだった。痛い。心が痛くて、心臓の鼓動が鋭くて、息が重い。苦しい。

そして、彼のその口は止まらない。

「弱いのは、きっと正しいことだと思うけどね」

だって、

「弱いから、人は武器を作ったし。弱いから、他者と手を繋げるんだから、さー」

言葉は抑揚も無く、ただ平淡に呟かれた。その手は無意識の行動なのか知らないが、安全装置を戻してストラップに繋がれた。
そして、ポーチを漁る手は、一つのハンカチを取り出した。
涙で歪む私の顔にハンカチが近づく。
思わず、ひ、と小さな悲鳴が漏れて、逃げ出そうと顔を逸らすが、片手で頭を掴まれた。驚くほどの力だった。どこにこんな握力があるのだろうか。
強引に拭かれる。

「……俺は、慣れっこだからさ。別に、恨まれても、憎まれても、平気だけどね。……だから、どうぞ殺したければ殺してくれて結構。俺は死なないように、生きるために逃げたりするから」

目元を拭かれ、目尻も拭かれ、鼻も涙の通った跡も全部拭かれる。

「それは、……慰めてる、つもりですか」

いつでも殺したければ殺せば？
俺、平気だから。だから、憎んでもいいよ？
そう言っているのだ。背中を、押しているのだ。
馬鹿に、するな。
憎む相手なんかに慰められる気なんか、無い。
すると、アルファさんは、まるで罪の全てを許すかのような優しい、慈しみを持った笑みで、

「そうなるね」

頷いた。

●

脳内で、何かが切れる音を聞いた気がする。

●

怒りが爆発した。理性も吹き飛んだ。
動かなかった腕が怒りで煮えたぎる思考に突き動かされる。
拳が握られ腕が動く。

「ふ。ざッ」

――けるな！！
と続くはずの口は、――拳が目の前の男の頬を打つ音で、動きを止めた。
あっさりと、その顔が後方へと飛び、体も付随して飛んでいく。
それでも、怒りは収まらない。
小石の群れを蹴飛ばすように立ち上がり、走る。
その飛んだ肉体の腹にブーツの底で思いっきり踏みつけた。
鳩尾に入ったブーツの踵は、踏まれた男の口からくぐもった短い悲鳴と、息を吐き出させた。

「ぎッ、」黙れ。

踏みつける。
踏みつける。
踏みつける。

踏(死ね)みつける。

踏(死ね)みつける。

踏(死ね)みつける。

踏(死ね)みつける。

踏(死ね)みつける。

踏(死ね)みつけ踏(死ね)みつけ踏(死ね)みつけ踏(死ね)みつけ踏(死ね)みつけ踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み踏(死ね)み。

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ

顔を蹴る。

シネ。

顔を蹴る。

シネ。

なんで(胸倉を掴む)、殺(殴る)した。

イジ(殴る)お爺さんを。

アルィ(殴る)お婆さんを。

アーニャ(殴る)さんを。

ヨルク(殴る)おじさんを、アサミ(殴る)さんを、アルシャ(殴る)さんを、ヨクトさん(殴る)を、イスキュル(殴る)さんを、キリエ(殴る)おじさんを、サオ婆(殴る)さんを、ミミさん(殴る)を、アィル(殴る)おばさんを、

他(殴る)にも沢山の、
優(殴る)しい人たちを、

「――皆を、何故、殺したッ！！！！」

肉を打つ音が断続的に響き、火で揺れる影は二つ。片方は殴られ、もう片方は殴る。
影絵の世界は無機質に踊り、痛みも苦しみも悲しみも憎悪も殺意も決して映さない。
気がつくと、シルベは怒りで眉間に皺を寄せ、柳眉を逆立て、歯を剥く中、泣いていた。焚き火の炎は、その般若の形相に光と影で起伏を生み、ぬるい水には光を与えた。
火は平等だった。暗闇も、殴る腕も、血の滾り煮える視界も何もかもが平等だった。
平等に、残酷な現実しか与えなかった。
ぜー、はーっ！
荒く息を吐く音と、肩を上下する音。殴打は終わったらしい。だが、それでも少女は胸倉を掴まれた男を睨む。
その顔は、瞼は、頬は腫れて。紫色の内出血が白い肌に痛ましく浮かぶ。唇の端は切れ血を流し、口内も血まみれで赤く、こめかみや、左目からも血を流している。
腹部は黒のTシャツで隠れて見えないが全体が内出血や腫れを起こしている。また、鳩尾辺りが異様に腫れているのは、肋骨の何本かが折れているからだ。
息は絶え絶え、体のどこもかしこもおかしくなっている。
だが。
生理的な痙攣をピクピクと起こしながらも、その顔は、――笑顔に変わる。
驚愕で動けなくなったシルベに、アルファの口が動く。
息を吐きながら、嗄れたようなのどを、ゆっくり使用するかのよ

うに。

「ま、」　「く」　「ん」　「……？」　「ぞ、」

「――っ！」

一瞬で、怒りが消え失せた。
その事実に、シルベの顔が恐怖で歪む。
おかしい。
こんな事をされても、笑うなんて、おかしい。
やっぱり、どうかしてる。
そう気付くと、恐怖で腰が引け、さっきまでの怒りが急激に萎む。
次に生まれた感情は“恐怖”だけだった。

「ヒッ……」

胸倉を掴む手が自然と解け、その場にしりもちを付きながら、後退り。

「あっ……あ、あ、ぁ……」

掴んでいた手が離れた事で、自動的にアルファの体は上体を少し起こしたものから、完全な仰向けになる。
すると、

「……なんだ、殴れるじゃん」

その体が唐突に起き上がった。

そして、

「ぁあっ……あ？」

その体中にあった傷が、すっかり無くなっている。

口端の切れも、こめかみの傷も、顔全体の腫れも、紫色の内出血も、全てが無い。

は？

とシルベの心の中の恐怖もさっきまであった怒りも何もかもが吹き飛ぶ。

何、これ。

そう、口は動いていただろうか。

目の前の青年、――いや、化け物は、立ち上がる。体の調子を確認するように各部を動かすと、にっこり笑った。

「いくら治癒できても、痛み自体は多少は残るんだよね。よく分からないけど、どうも俺が治しているのは肉体の傷のみみたいでさぁ。いやー、一度右足を引き千切られた時があったけど、あの時は歩くだけでもしんどかったっけ」

笑う顔は、焚き火の光に照らされ、陰影が印象を強める。

“笑顔”というものを芸術品に昇華させたような笑みの美しさに、狂気と異常が混同し、爆発的に恐怖が心を侵食する。

笑みに恐怖を覚えたのは、初めてだった。

「んー、意味解らないって顔してるね」

化け物が言う。音色は優しげだ。

全身に鳥肌が立った。

簡単に説明するとね？　その首が僅かに右に傾いた。白金の髪は、火に照らされて光り輝いた。

「……俺の体はさ、ちょっと異物が入り込んでいるんだよ」

自身の紅の瞳を指差す。その瞳は、発光していた。今更のように気付いた。指摘されないと気付けないほど、心が恐慌していた。

暗闇に紅の筋が二つ走る。

そして、その目は、瞳孔が猫のように、アーモンド型になっていた。

獣の瞳孔だ。

「こうやって、自身の危機……ま、怪我を負うと勝手に発光してね」

美麗な顔立ちに、血よりも濃い紅で輝く、獣の瞳。

自分（人間）とは決定的に何かが違うものに対する、純粋な恐怖と、その、目が潰されそうなほど美しい紅の輝きに、圧倒的なまでの神々しさを感じた。

知っている。

この、自分では太刀打ちできないと直感で感じる恐怖と、自分の弱さを実感するような敬いの感情が何に対するものか、私は知っている。

神様（異物）だ。

「異物の目なんだよ、これ。……異物の中でも覇者たる存在、龍の瞳でさ。
全てを見通し、全てを睥睨し、何もかもを視線で平伏させる、――龍王グズィ。アイツは、覇王(エンペラークラウン)の王冠って言ってたっけ。
……ちょっと昔に色々あってね、両目を潰しちゃってさ。そしたら、俺の住んでた地域にいた龍がくれたよ」

割といいやつだったねアイツ。頭良かったし。
そう、懐かしむ口調で呟く化け物。
だが、頭の中の知識に引っかかるものがあった。

「そ、そ、そそ、それって……異物刻印(クラウンチップ)……禁呪、じゃ」

異物。本来の生態系から外れ、異常なまでの身体能力、肉体構造、説明不可能の力を所有した生命体。辺境の村等では神として祭られたりし、そのために奉る人々を異端者区分民と呼び白い目で見られる。
そして異物の肉体細胞や内臓器官、果ては脳には、驚異的な力――例えば人の何百倍もの治癒能力――が備わっており、それらを人体に植えつける事で、その異物の能力を得るという方法。それが異物刻印(クラウンチップ)。
だが、副作用も強く、たかが肉片の一ミリを異物刻印(クラウンチップ)に使用しただけの者でも、ほとんどが数年の間に死亡している。そして、大抵の場合は植えつけた時点で拒絶反応が発生し、運が良くて半身不随。最悪の場合肉体の内側から爆発して肉を周囲に撒き散らし死亡。死ぬ確率は約九十五パーセント。だから、大陸中で禁呪として扱われている。それでも、手を出す人間は多いらしいが。
だが、目の前の化け物は平然そうに、

「ああ、そうだよ?」

と頷いた。やはり、笑みのまま。
そして、少し恥ずかしそうにはにかみながら、頬を掻く。自分の過去を晒すのを恥らうように。
その、真っ白で、傷一つ無い頬を。

「俺さ、十一歳でこの目に鞍替えしたんだけどもね？　目が勝手に神経と繋がるんだよ。それまでは、しばらくの間盲目の生活を送っていたんだけどね。それで、ようやく見えるようになったら、たったの一夜でさ」

両腕を大きく広げる。

「この、まぁ大体十八かそこら辺の図体にまで成長してね。たぶんこの目の副次的効果なんだろうけど……そりゃもう、生きる世界が変わったよ。何しろ視力は精密に測ったら片目で二十以上あるし。音速の限界まで余裕で目が追いつくし。傷はほとんど五秒程度で治るし。身体能力、まぁ膂力（りょりょく）ってやつも、ガタイのいいオッサンの十倍はある」

でも、とその姿勢のままに笑みは告げる。
僅かに眉を八の字にし、困ったと言うように。

「俺、どうも異物に適正がかなーりあったみたいでさー。というか、それどころか異物が入り込もうが副作用らしいものも無くてさぁ……。うはっ、俺スゲェ！　……なーんて喜ぶ暇も無く、気付いちゃったんだ。
――成長しないんだわ、この体。体毛、髪とか髭は伸びる。けど、十一から十七までの六年間、一度も肉体に変化が無かった。
肌は老いもしないし日焼けもしない。外見的な筋肉量の変化は無

し。背丈は伸びない。傷は、ほとんど全部が再生する。……まぁ、心臓と脳みそはまだ穴を開けられたことが無いから、解らないけどね」

つまりさ？

「俺、――ちょっとおかしくなっちゃってるんだよ」

揺れた首は、紅いラインを二つ揺らし、車のバックライトのように夜闇に浮かんだ。

“断罪者を制裁できるのは咎人のみ”↓　どこに咎人がいらして？

気がつくと、朝だった。
すぐ近くで、化け物、ではなくアルファさんがいた。
無表情に何かをしている。肉を焼いていた。周りには、茶色い毛と、少量ながら血が散乱している。……その焼いている身の大きさから察するに、野兎だろうか？
私は、いつの間にか寝袋に入っていた。着ていたはずのコートは綺麗に畳まれ置いてある。いつの間に寝たのだろうか。
もぞりと、体を起こす。
全然寝た気がしない。眠い。というか、体が重い。凄くダルい。
音を聞いたのか、ばけも……アルファさんがこちらを向いた。その美しい、色彩感覚が狂いそうになるほどの紅色は太陽の光を取り込み、意志の灯る光を宿し、微笑みで僅かに細まる。

「うっす。……ダルそうだねー」

ケラケラ笑った。笑みに怖気立った。
気持ち悪い。死んでしまえばいいのに。
だが、挨拶はしようとおもった。化け物でも一応、一応は！　人間だ。
僅かに頭を下げて、

「……おはようございます。化け――……あるふぁさん」

しまった。思わず化け物と呼んでしまいそうになった。
やってしまった。だが、もう割りとどうでも良かった。

人間じゃないのだ。異物刻印（クラウンチップ）を施して、身体が人間を超えている、化け物。
昨日の、あれだけ殴ったはずなのに平気そうに口を動かして笑った時点で、この男は私にとっての化け物だ。
化け物は、たはは、とおかしそうに笑う。
「別に化け物でも良いけどね。そんな感じの呼ばれ方、いつもだし」
「……」
本当に平気そうだった。
一体、何人を殺して、何人に憎まれているのだろうか。
分かりたくも無かった。ただ死ねばいいとおもった。
殺せるのなら、私が殺したい。
「……さて、と。肉を焼いているんだけども、食べる？　それとも、ちょっと奥にある泉で水浴びでもする？　ボディソープとシャンプーとタオルはあるけど。ああ、綺麗な水だったよ。うん、あの水はたぶん飲めるんじゃねぇかな」
指が示すのは、緑の生い茂る森。その奥に泉があるらしい。
確かに、そういえば昨日は色々ありすぎて体を洗ったりなどしていない。
「あー……じゃあ化け物さん、池で体を洗ってきます。見たら殴るんで」
そして、今日からこの男を化け物さんと呼ぶことにした。
さん付けする理由なんか、知らない。
知りたくも無い。

●

少し歩くと、なるほど確かに綺麗な泉があった。
底がハッキリ見える。小さな砂利石や、水草、小魚の群れが見えた。
――水が沸いているのかな。
そうなると、どこかへ出て行ってるはずだ。どこかは解らないが、小さな流れがあるのも見えた。
服を脱いで近くの木の幹に掛ける。下着も脱いで、大きいタオルも同じようにする。
均整の取れた肉体が姿を現した。
畑仕事をしているせいで、全体的に柔らかさと弾力が備えてある肉体。足も腰も腹回りも腕もしっかりと肉が削げ落とされ、その裸体はバランスよく痩せていた。シルベは少女なので、そういうのには気を使っていたらしい。肌は若さと元々の質が混じった乾燥などしていない、柔らかくきめ細かい艶肌。足は身長に見合って長く、毎日外に出るせいか、しなやかさと女性特有の丸みがあり、細い。無論腕も同じだ。胸もしっかりと大きさがあり、それが動くごとに柔らかそうに揺れた。
同性に羨ましがられそうなスタイルだが、残念無念また来年、シルベの周りは大人だらけ。褒められても、それが同性同年代のような羨望交じりではなく、若さに対する執念じみたものだったので、引き攣った笑みと謝辞しか述べられない。そんなだからか、あまり自分の肢体にも――太らないようにと気をつける位の気持ちはあるが――あまり興味が無いらしい。

耳を覆う部分の髪を縛っていた、簡素な髪縛りを外して、その服の上に置いておく。
栗色の髪が、朝日を浴びて艶やかに光った。首を二、三度回すと、それにつられて髪も踊る。しなやかに、一本一本は独立して他の髪を邪魔しないようにサラサラと。
誰が見ても綺麗だと認める栗色の髪だった。
しかしシルベはそれをいつも通り、大した興味も無く見つめ、いい加減少し長くなったなぁ、とか思いながら泉に身を入れた。

「冷た……」

ひんやりとした冷水が足先から踝(くるぶし)までを覆い、僅かに体が震える。だが、まだ四月だ。外は陽気で充満している。それが緩衝材となったおかげで更に足を進めることが出来た。
――冬に水浴びをするよりマシだし。
冬は、村の人が作った湯船に水を運んで、火で温めで入った。確かに暖まって良かったが、相当に面倒だった。
夏は暑いから、近くの清流の川が面白かった。
冬は湯船で、秋は少し我慢して川で水浴び。春はぽかぽかしながら水浴びだ。
そういうわけで、慣れた手つきで水に沈めた体を、手で撫でるように拭(ぬぐ)っていく。
と、そこで疑問に至った。

「……？」

それは、手の中にあるタオルと、ボディーソープとシャンプーである。

どう使うのだろうか……。

村にタオルはあった。体を拭いたりもしたからまぁいつも通り使えばいいのだろう。――だが、この小さなビニール製のパックに入った液体状の何かはなんだ？

ボディーソープ。ソープが解らない。ボディーはつまり体だ。……体？　体をどうしろと。まったく意味が解らない。

シャンプー。もはや何がなんだか解らない。

……。

パックを裏返してみる。そこには何やら小さな文字がたくさん並び、読めるには読めるが、カタカナで書かれたよく解らない物質っぽい名前が、何ミリグラムだとか書いてある。残念ながら用途等は書いてなかった。

「ふむ」

化け物さんはこれをどう使うのだろうか。流れで受け取ったが、正直使い方がまったく解らない。仕方なく、体を洗う作業に戻る。

泉に顔を鎮めて、髪をゆっくりと撫でて、頭皮も指の腹で、ツツツ、と動かしていく。息が苦しくなったところで顔を上げ、再度息を吸い込みまた顔を鎮める。

それを数回繰り返して、次に体の細かいところを洗っていく。

「お？」

体を洗いつつ暇つぶしに弄くっていたら、どうやらビニールに切れ込みが入っていて、切れるようだった。

……切って大丈夫だろうか。

中に入っているのは間違いなく液体だ。

それがこの泉に入り込み、そして草や肉眼では見えない微生物に被害を与え、それを食べる魚たちが死ぬような事があったら……。
そう思う。つまりこれはヤバい。危険物質ではないのかと危惧。
だが、
――面白そうですね……。
生まれて十五年、未知の物質との接触である。宇宙人並みに珍しいと思える物質だった。いや、この場合液体だろうか。ともかく、その未知の存在に目が輝いているのは事実だ。ええい、どうすれば。迷う。どうすればいいのだろうか。……。

「ええい、面倒ですね」

考え込む内に面倒くさくなったので、結局切ってみることにした。それはボディーソープだった。
一応、泉から右手を出してからパックを切った瞬間、

「わっ、わ、わぁ……どろっとしてますね」

思わず驚きと嬉々混じる声が出た。
右手の中に、透明などろりとした粘性の液体が絡みついていた。ネバネバはしていないが、粘り気があって、水のようにサラサラしていない。匂いが、花の甘い匂いのみを抽出したような香りで、少し作り物っぽさがあった。ただ悪い臭いではなかったのでよしとする。
ほぉー、と興味深げに見ていたシルベだが、その動きが、ピタ、と止まった。

あれ？　これ本当にどう使うのだ？

つまりそこだ。どう使えばいいのだコレ。液体で遊べばいいのか？　どうやって。ボディーを使えばいいのだろうか。だからどうやって。

……。

液体が右腕を伝い、ゆっくりとひじ辺りまで来た。

「あー……」

邪魔だと思い、その液体を拭う。拭うと腕の表皮に張り付くように伸ばされた。しまった！　液体が粘性のある物質であると完全に失念！

化学製品、という、何だか悪いイメージしかない言葉が脳裏を過ぎる。

慌てて液体の伸ばされた部分を擦った。いつの間にか泡に変化していた。げぇっ！　恐ろしきかな化学製品！

もっと擦った。更に泡が増える。げげっ！

そしていつの間にかボディーソープは　右腕全体を覆っていた。更に激しく擦ったために、他の場所にも掛かっていた。そこを焦りの混じる軽いパニック状態で擦ると更に泡が侵食していく。

「――！？　――――――！！」

もはや声にならない悲鳴をあげ、躍起になって体を手で拭う。しかし泡は落ちない。しかも泉に落ちた泡は溶けていくではないか！

最悪だ！！　さ、魚が！　生物がッ！！

悲鳴ももはや上がらず、顔を真っ青になったシルベ。その擦る手を、一瞬止める。そして、

面倒くさっ。

そう思い、泉に身を沈めた。

じゃぼん、と気泡が出来、体中の泡が落ちていく。水の流れに沿って泡が流れていくのを、シルベはもはや無感動無表情な瞳で見ていた。

体を上げる。ふぅ、と一息付いて、液体の混じった水が髪にかかっていそうな気もしたので、もう一度髪を洗った。

そうして、ハプニングもあった水浴びを終え、大きなバスタオルで体の水気を拭く。

――これから、どうしようか。

髪を拭き、乾かし、考える。

「……逃げ、れますよね」

キョロキョロと周りを見る。

あの川原とは、距離で言えば大体百メートルほど。足音も聞こえまい。

逃げれる。

だが、

――逃げて、どうするんでしょうか。

相手は化け物だ。長く帰らなければ、怪しむ。そしてここへ来て、逃げたのだと悟るだろう。そうしたら、どうせ化け物さんの事だ。自分では解らないような方法で逃げ道を特定し、追いかけてくるだろう。

いくら畑仕事で足腰には自身があっても、それは同年齢の少女同士であったならば、だ。ガタいの良い男性の十倍の膂力を持っていると豪語する化け物さんには、絶対に走っても勝てないだろう。

――無理。

気付くと同時、絶望が心を染めた。
無理、なのだろうか。
諦めの感情。これから自分の身に何が起こるのか解らない、不透明で濁りきった未来への漠然とした不安。押し固められた焦燥感。
迷う。逃げるべきか、逃げずに帰るべきか。
逃げてどうするのだ？　私には帰るべき家も人ももう既にいない。皆死んだのは明白な事実だ。嫌だ、受け入れたくない。あんなの幻覚だ。だったら確認しに行けばいいじゃないか。でも、でももしも本当に皆死んでいたら。いいや、憶測じゃなく、死んでいた。あの血肉の酷い臭い。臭かった。臭いと思った自分が酷く情けない。でも、それももしかしたら幻なのかもしれない。皆、私を探しているかもしれない。私が帰るのを待っているかもしれない。本当にそう？　私は、待っていてくれる人がいる？　いや、いる。化け物が私を、何をするか解らない男に引き渡すために、待っている。ニコニコニコニコ、にこーっ、と笑いながら、待っている。最悪だ。私は、あんなの嫌だ。死んでしまえ。死んで腐れ。腐って消えてしまえ。だけど、でも――。

でも、今の私じゃ無理なのだ。

『力』が無い。足りないとかではなく、無い。異物刻印（クラウンチップ）は嫌だった。あんな化け物のようになるのは嫌だった。だから、足りないのではなく、無い。
じゃあ、どうすればいいのだ？
力も無く、だから逃げても捕まる。最悪、殺されるかもしれない。怖い。銃口の冷たさを、一日経った今でも忘れられない。怖い。
怖いのは嫌だ。
逃げたい。だけど、捕まって銃口を押し付けられるのも嫌だ。

どっちも嫌だ。
だけど、でも、じゃあ、そうだ、でも……そんな言葉が低回し、ぐるぐるぐるぐる、現実も回る、思考も回る。
そして、いつの間にか髪も体も乾いていて、思わず、ブルり、と体が身震いし、そのため服を着た。
服を着ると、暖かみが残った服が体に触れ、体の震えは納まった。しかし、戻るか逃げるかの二択も、更に選択を迫られたという事だった。
――……。
僅かに、ため息を吐いた。

「無理、ですよ」

どうせ、逃げられない。いくら考えようと、アレは人じゃない。思考回路はまるで人じゃなく、行動する肉体は肋骨が折れようが速攻で再生していく。足止めに罠を仕掛けようと悠々と無視してくるだろう。
だったら、諦めよう。

もう、知らない。

二日後、自分がどうなってるとかは考えず、絶望に近い心境で、――川原への、帰路に足を向けた。

●

――いい感じに絶望してるなアレ。
使い捨てのボディソープとシャンプーの詰まった、小さな液体パック二つと大きなタオル一枚に小さなタオル一枚を渡して、それを受け取ったシルベを見送ってから、歩いていった方向を見つめながら思う。
まぁ、誰だって似たような反応は寄越す。そして、俺を恨んだ人間は、いい感じに絶望する。
希望も怒りも、何もかもを、自分では太刀打ちできない存在に破壊される。そうしたら、簡単に人間は絶望する。
勝手に憎ませて勝手にその憎悪を完膚なきまでに恐怖でぶっ壊せばそれでハイ終了。特に異常なもので破壊すれば更に効果は上昇。
だが、人間の心は結構簡単に回復する。絶望しようと、結局その絶望も過去の産物となっていき、やがて情報としてしか意味を成さなくなる。
風化だ。
その風化具合は、どれだけ重い事実に絶望しているか、に比例するのだろうけど、今回はあと二日保てばいい。
ちょろい仕事だ。
野兎の肉を串に差したのを焼きながら、呟く。

「……このまま、二日すぎてくれればいいんだけどね」

嫌な予感というより、仕事にハプニングは付き物なので、警戒は怠ってはいけないだろう。同じ仕事をやっていた奴が突然裏切ったり、仕事途中に歩いていたらいきなり爆弾を投げつけられたりもしたことがある。どちらも致命傷を五秒で治して笑顔で立ち上がったが。
――このまま、逃げるかね。
シルベのことだ。
もし戻ってきたら、それはもう抵抗する気も無いということだろ

う。それなら良しだ。
昨日わざわざ怒らせた甲斐があった、という事になる。
あのまま燻った憎悪の感情でいられても良かったのだが、そうなるといつ反逆されるか分かったもんじゃない。それなら、わざと自身の感情を明確化してもらって、そしてその憎悪をへし折ればいい。そういう意味で、俺の目は非常に役に立つ。
何しろ、龍王の瞳なのだから。
紅色なのも珍しいだろうけど、それが自立発光したり、獣の瞳孔になったりした日には、異物だろうよ。
それに意外と力はあるようで、肋骨が折れたりしたり、顔面中を腫れだらけにしてくれた。おかげで治癒の効果も覿面（てきめん）。
案外予想通りに事が運んで、拍子抜けする部分もあったけど。
ただ、

「出来れば、このまま一時の殺意で終ってくれるといいんだけどねぇ……」

そうならない、つまり俺に一生を使ってでも復讐するとかいう輩になってほしくは無い。
人生長いだろうに、俺だけに使うとか馬鹿にしか見えない。それに、そんな輩が増えて、仕事に支障を来すなんて怒りを通り越して呆れる。
まぁ、殺せばいいだけだろうけど。
銃弾が当たろうが肉体は完治するし、内臓（脳と心臓以外は実証済み）を潰されても治る。血が足りないと勝手に作られるし、肉体の欠損はやっぱり五秒ほどで再生する。そんな俺が、どうやったら死ぬんだろうか。
だけど、いくら体を切り刻まれても死なないのだとすると、

「俺は、いつ死ぬのかねー」

正直、自分では年齢をたまに忘れるほどだ。だから、というわけでもないが、二十歳という解りやすい年齢を使っている。それを言い訳に酒を飲んでいるのは個人の趣味だからいい筈だ。タバコは吸わないけど、でも酒くらいいいじゃないかー！　好きなんですよー！！

不老不死、なのだろうか？　まだ心臓を潰された事も脳に風穴が開いたことも無いから解らない。そもそも、肉体的な成長や老いが無いだけで寿命があるのかも解らない。

全ては、一度死んでみないと駄目だ。

でも、心臓を潰されたり、首が切断されても死ななかったらどうしよう？

簡単なことだ。

「そっの、とっきは～、ひっとをー、こっろしてこっろして……」

僅かに、目を細める。

――――少年。君は何もかもを憎んで、絶望の中で生きろ。

――――その憎悪の感情と、絶望の希望的観測をしない心境は、必ず少年を最強にする。

――――だから少年。君に託そう。

――――最強になるための力、覇王（エンペラークラウン）の王冠を。

――――そして辿り着け、神の玉座に。

グズィ（龍王）はそう言った。

そして、自分で自分の腹を引き裂き、その中で奴の肉体の結晶体である、三本の刀を俺に渡した。目を自分で抉り、俺に渡した。
喰龍（胃腸機能結晶体）、全てを溶かし吸収し、力にする刀を。
律龍（筋肉繊維結晶体）、刀に圧倒的な膂力を内蔵し、常に微振動していて、触れただけで人がグチャグチャになる刀を。
裁龍（神経物質結晶体）、俺の腕と同化して、俺の身体能力に刀、つまり龍が持った神経伝達速度を併合し利用できる刀を。
そして、あの龍が持っていると、視線のみで人の精神を破壊できた瞳。
全て一つ一つが覇王の王冠（エンペラークラウン）だと、グズィは言った。
アイツは、俺に何を託したかったのか。
そもそも、覇王の王冠（エンペラークラウン）ってなんだ。グズィの野郎、まさか厨二病だったとかじゃねえよな？　邪気眼じゃねえんだから。いや、瞳は深紅なわけだが。つか関係ないか。まぁ、最初は比喩だと思っていたが、どうなのだろうか。異物刻印（クラウンチップ）の中には、その超上的な力を段階的に分けて使用できるタイプもあるとか聞く。もしそうなら、俺も！？　俺もそんなカッコいいのが使えるの！？　じゃあ何か？　アレか！　――目からビームってか！？　それとも腕をクロスにしたらその交点からビームでちゃうの！？　スゲー！！　それともそれとも！？　宇宙から隕石呼び寄せてズドーン！　ってか！？　うはぁ！　それもいいな！
そんなこと出来たら俺、もう真正の化け物だな、と一人鼻息荒げて頷いた。でもそういうの、嫌いじゃない。だってカッコいいじゃない。銃も刀も持ってる俺からすると、そういうお子ちゃまっぽい最終兵器は嫌いではないのだ。もうちょっと贅沢言えばやっぱり腕を飛ばして殴るとかもいいよね！　あとはほら！　合☆体とか！？
それにそれにィ？　変☆身とかも絶対良いよな！！　カッコい――――！！

閑話休題。完全に話が逸れた気がする。

……ともかく、だ。グズィはそれを俺に渡して、何をしてほしかったのか。

解らない。

だけど、俺はアイツに背を押されなくとも、決めたのだ。

「……人類の末期を見るだけだよ」

銃が無くなったら、刀で挑む。それも無くなったら肉体だけでもいい。無論目からビームを出したっていいのだ。

俺は、人を殺して、人類を撲滅したいんだから。

充分に焼けた所で、串を別の場所に刺す。そして、火を消した。

「……ともかく、仕事だ仕事」

はぁやれやれとため息を吐いた。その場に寝転ぶ。

空は雲がまばらに浮かぶ晴天。お日様が眩しく元気そうだ。

――人の送迎ねぇ。

ついでに殺人も。こっちが俺の本分な訳だが。

「……」

川の流れる静かな音。森の風に吹かれて鳴るざわめき。それくらいしか音がしない。

音はしない。

だが、

「……どーも、クサイんだよな」

おかしい。
何がと問われると、あの村の住人達だ。
あの村の住人。
アイツ等、何で銃なんか持ってたんだ？
普通の村に、サブマシンガンに、グレネードランチャーや手榴弾、アサルトライフルなんかあってたまるか。
何かがおかしい。今まで見た村に、敵意をくれることはあっても、銃弾を寄越す奴らなんかいなかった。
銃は、決して安い代物じゃない。銃弾はクソ安いが、銃は手にする人間自体が少ないはずだ。まだ、世界はそこまで腐ってはいない。平和的解決を望もうと口上手になり饒舌になり、相手の揚げ足ばかりを取る事を考えて、最後の手段として暴力に訴えている世界だ。そりゃ軍は銃器類は持っているし、警察も同じだ。だが、ただの平和な村人がそんなものを持ち運ぶなんて、聞いたことが無い
――田畑を耕していた奴らが、一瞬で銃を持ち運びやがった。
あの村に、十歳以下の子供がいなかったのも怪しい。全員が三十歳越えの大人達ばかりだ。なるほど、道理でシルベが懇切丁寧な性格をしていると思った。年上相手に敬語を言うのは、これが理由か。何しろあれだけ蹴って殴った相手にも敬語を使うのだから。
あれだけキレるくらいには、シルベは村の住人を愛していた、という事になる。何しろ一回蹴ったり殴ったりするたびに『死ね』の一言だったのだから。
となると、村の住人は、シルベに対しては結構優しく接して、大事にしていたという事か。割と言葉遣いも綺麗で、教育も成されているようで、だから喋りに知性がある。人に素直に従うのも、ちゃんとしつけが成されているんだろう。
――何がしたかったんだ？
猪は口ぶりから察するに結構昔からあの牢の中っぽいし、それならわざわざ、大事にしているらしいシルベを餌にする必要が無い。

そもそも、ああいう小さな村というのは子供を大事にする。ならば、やはりシルベが餌となる理由が思いつかない。
子供のいない村。銃器を所持する村人達。唯一子供だったのに、何故か供物となった娘。
どこにも当たり前の常識が無い。村のしきたりと言われればそれだけだが、だがやはり違和感は募る。
意味が解らない。

「なんだこの依頼……ワーストスリーに入る面倒くささだな」

だが、物的証拠は無い。
そもそも、俺が疑問に思っていることは俺の憶測が勝手に出した結論だ。
全て、可能性の話だ。

「可能性、ねぇ……」

げんなりする。
そういう言葉は嫌いだ。そんなものは楽観的観測、希望的観測でしかない。
世の中絶望一色で、不幸も幸せも一瞬の紛い物だ。人生に刺激をもたらそうと、そんなものは風化する。
可能性、もしかしたら、もしも、もし、……そんな言葉で、未来も過去も現在も変わるわけが無い。
もしもあの時――、なんて悔やんでも世界は変わらないし、もしかしたら明日は――、なんて言葉で自分を変えることは出来ない。
人間は、言葉一つで自分の本質を変えることなんて出来ない。生まれ持った本質なんて存在しないし、だから、変えられるのは、生み出せるのは、自分を育てた親だけだ。
人格形成にもっとも重要なのは、俺は、幼少期に受ける親からの

感情の全てだと思う。
あれが好きだ。(好意)あれは駄目だ。(嫌悪)あれは面白いぞ。(嬉々)あれは良い。(興奮)あれはウザイ。(憎悪)あんな奴がいるから。(怒り)アイツのせいで。(嫉妬)
そんな、感情の唾棄がなければ、人の心の大本は作られない。
それが無けりゃ、アイデンティティ(こころ)なんぞ得られない。
それが無けりゃ、何もかもを捻じ曲げた視界で生きる事になる。

俺みたいに。

親父は、カニバリズム(人肉嗜好家)だった。
母さんは、だから喰われた。人の肉が大好きな親父の何もかもが母さんは大好きだった。だから喜んで親父に撃たれたし、喜んで自分の腕を切り落としても見せた。それが俺の常識だった。愛し合う二人は、胃の中で溶け、腸で吸収され、血肉となるのが普通だと、七歳になって周りの世界を見れるようになるまで思っていた。
そして、俺の家庭に並ぶ肉は、全て人の肉だった。荒廃街で殺しは常識。だからこそ、親父はあそこを好んだ。
だから、俺は人の肉を喰う事に何も違和感なんて感じない。だって、それが親の常識。好きという感情だったのだから。
今では、それが異常だったことは解る。ただ、喰う事自体に忌避も嫌悪も感じない。慣れてしまっている。
不味い肉。だけど、喰えば命に変わった。人を喰らって人として生きる。それが素晴らしいと親父は言った。意味が解らなかったが取り合えず頷いて同じ肉を食った俺は、そういうものなんだと思った。
だから、俺はあの時も喰った。
母さんを、親父を。
死人の、血抜きも何もされていない無消毒の汚い肉をナイフで引

き裂き丁度良い大きさにした。

喰らった。

ぶよぶよした肉塊を大きく開いた口で噛み、滴り口の中に充満する血の塩みたいな鉄みたいな良く解らない味に吐き気を感じながらも顎を動かして租借する事は止めず命を延ばすために嚥下し初めて食べた生肉がずるずると喉を滑り落ちる不慣れな感覚に吐き気で全身に鳥肌で立たせながらもその血を飲みその内蔵を噛み潰しその筋肉を引きちぎりその肉を舌上で転がし脂肪を舌で舐めとっ――、

●

誰かの肉が、暴れた気がする。
ナゼ、タベタ。

●

「おっ、えぇぇぇ、ぐボォ、ァ、ァ。……ぎッ、が……ぁぁぁ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そんな、本当に人の出せるのかと言う程醜い音が聞こえたのは、体や頭を洗い終え、拭いて服を着て、戻ってきた時だ。
驚きながらも視界に入ってくるのは、化け物（アルファさん）が蹲って、吐瀉物を大量に喉から吐き出している光景だった。

胃の中の物が、消化されてしまって無いのか、出てくるのは透明な胃液だ。
キラキラと、その液体は光を浴びて輝いた。汚いものは、太陽の下では美しい液体になった。
その表情は、初めて見る。苦渋の、苦虫を噛み潰すような表情。
何も言えずに呆然としていると、化け物は、
「喰うしか、無かったじゃんかよぉぉぉ……どうしろって、言うんだよぉ……！」
ようやく吐瀉物を吐き出すのを止めて、崩した正座のような姿勢で空を仰ぎ見た。首は九十度に曲がり、空を一直線に目は見る。
その紅色は、涙で潤み、酷く人間味を帯びていた。
ちっぽけな、ただの子供が、そこにいた。
「親父ぃ……母さん……俺、悪いのかぁ……？　死にたくないからって、殺して、そして食べたのは、駄目なのか……？　なぁ……なぁ、どうなんだよ……」
さっきの汚い液体とは違う、純正の感情の物質が頬を滑り落ちる。やはり太陽は平等に光を与え、その液体を輝かした。
表情は、何も浮かんでいない。さっきの苦悶も、何も無い。ただ空を震える瞳で見つめ、口から懺悔のような言葉を言い続ける。
「俺は、化け物だよ……人の肉を食べて、生きてる、化け物だよ……。好きでもないのに食べて……俺は、本当に、どうしようも無く……怪物、だよ」
やめろ。
それ以上言うな。

心が、そう低く唸る。
聞きたくない。
「どうしろっつぅんだ……俺は、もう生きるしかない。どうやっても、死ねない……」
貴方は、私が、憎むべき対象、だろ？
「死にたくない俺は、生きるしかなくなった……なのに、さぁ……どうして殺すんだ？　食べるわけでもないのに」
それが、何故泣く。
何故懺悔する。
「……なぁ、グズィ。お前は、どうしてさ……俺に、目を、武器を、与えたんだ……？」
ふざ、けるな。
「嫌なんだよ……」
やめろ。
「――俺は、死にたくなんか、無いんだよ……」
“キレる”というスイッチが入った。
「ふざけないでくださいよ……！！」
足は速く、震えながらも動いた。

その声に、化け物がこちらを見た。最初は、え、と目を丸くして呟いて、次に、ああ、と僅かに頷き、最後におかしそうに笑った。
目尻には涙が溜まり、笑みで細まった目尻のせいで、頬を滑り落ちた。
美しいモノは、何をやっても美しい。
その頬が涙を流れようと芸術作品になるし、懺悔すら神聖なものになる。
うぜぇ。
反吐が出る。
足を早歩きにさせ、化け物の前に立つ。
「……？」
小首をかしげ笑うその姿は、まるで親愛する人が死んで、それでも泣かないようにしようと踏ん張る子供が、必死に笑っているようで、異常なまでに涙が似合っていた。
もう一度思う。
……うぜぇ。化け物が泣くな。……
だから、感情に素直に従ってみた。
右足を上げる。スカートの中が見えるとかは気にせず、ただ、感情のままに動こう。
そのまま、ブーツの厚底を、――思いっきり化け物の顔にぶつけた。
「――っい！？」

驚きの声が聞こえ、そして吹っ飛んでいく。
それを苛立ち募る目で睨んだ私は、広まった距離を歩いて縮める。
一歩。
「馬鹿にしないでください」
二歩。
「化け物さん。貴方、怪物でしょう？　人を殺すのに何もしがらみなんか持っちゃいない、怪物でしょう？」
三歩。目の前にいる、よろよろと体を上げた怪物の腹を蹴る。
「だったら！」
蹴る。腹を押さえ、下がった頭をまた蹴る。
「そのまま！」
後ろへと飛ぶ頭を見ながら、腹を踏む。くぐもった、かえるの鳴き声のような悲鳴が聞こえた。
「化け物で、いてくださいよ……！！」
じゃないと。
「私のほうが、おかしくなるじゃないですか……ッ！」
怒れる足は風を切る音で吼える。

「――人間なんかになるなァ！」

右足が走り、その顎を的確に打ち据えた足は一瞬でその胸へと落ちる。

「ちっぽけな人間みたく、泣くなっ！」

その胸骨を踏みにじり、心臓すら潰す勢いで踏む。踏む。踏む！

「貴方、どれだけ自分が悪い事をして、それで恨まれてるかわからないんですか！？　慣れっこ？！　だったら！　だったら！！」

蹴ったことで生まれた傷の全てが癒える。だが、蹴る。

繰り返す。

鈍い音は断続的に響き、そのたびに低い悲鳴が小さく漏れた。

「あなたは、私にとっての、永久に憎まれるべき対象であり続けるべきだ……！！　刺される覚悟を持つべきだっ！」

膝立ちになり、呻くその顔を殴る。砂利にぶつかる体の、胸倉を掴んで寄せる。また殴る。

「それが貴方の義務だ」

拳は小さい。力も貧弱だ。

でも、殴る。痛ませたいとかそんなんじゃなく、殴らないといけない。

この男を、化け物にしないといけない！　人間なんかにしてはいけない！

そうしないと、私が狂ってしまう。何を憎めばいいのか解らなく

なる。
だから殴る。
「人に憎まれる対象の、当然の義務だッ！」
その表情は、苦しいと告げる。目を強く閉じ、眉を歪めて歯を噛み合わせる。
いい気味だと思い、再度殴る。口から血が吐き出た。
もっと苦しめ。苦しんで、村の皆の苦しみを味わえ。
「そして、憎む人間は、憎んだ対象に、復讐する権利が存在する……！！」
化け物さんは、そうやって、人に恨まれてきたんでしょう？
だったら、もっと殴っていい筈だ。
怒っていい筈だ。
恨み憎みの代弁者になっても、いい筈だ。
「だからッ！」
――そう！　代弁者！
「貴方をッ」
――自らの殺意を！！　この化け物を憎んだ人々の殺意を！
「私はァ！！」
全て、私が――！！

「一生許さない――ッ！！！！」

肉薄する。その目を穿（ほじく）らん勢いで、至近距離で睨む。

「許さず、いつまでも馬鹿にし！
卑下し！
蹴り！
殴り！
憎み！
必ず！　必ず！
――必ず殺します！！」

そう、いつまでも。
いつまでも？
自分の言葉に気付いた瞬間、自分の心に、ストンと腑に落ちるような感触があった。
――そうだ。
そうだ。そうすればいいじゃないか。そうですよ。どうせあと数日したらあの男のところへ行くんだし、そうするくらいなら。
何もかもを失った私の、生きがいが閃いてしまった。
一瞬で怒りの感情が吹き飛び、次に生まれたのは――やる気だ。
口が自然と、言葉を生んだ。
その口は、笑みを作っていた。
充実感と、自分に対する満足感で、笑みが出来たのだ。

「……決めました」

「……何を」

化け物さんが、口端から血を流しながら、傷の癒えた、いつのも秀麗な顔で、横目にこちらを見る。

その顔が美形なのが腹が立ったのでもう一発、笑顔で殴っておいて、胸倉を掴んだ手を放す。

どさっ、とその体が倒れ、殴られた頬を押さえながら上体を起こした。眉間に、痛みで歪んだ眉が皺を作っていた。

それを見て、うん、と頷く。

両手の拳を握り、言った。

「――私、貴方に制裁を加える人間になります。だから、一生貴方に付いていきます」

“誰も彼もが妄想癖”↓望んだ願望は叶いますか？

あ？

「ええ、そうですよ！　私、その権利がありますよね！」

あ〝？

ちょっと待て。

「何しろ？　貴方に全部破壊されたわけですし？」

おいおいおいおい。

「つまりこれは正当な復讐です」

……。

「よし、少し整理しようか。うん。えっと？　何？　お前、俺に付いてくるって？」

「はい」

「よしよし。んで？　付いてきて、俺に制裁を加えると？」

「はい。まぁ、暴行を加えるとかでしょうかね。まぁ、私平和主義者なので、そこまで暴力に頼りたくはないのですが」

ドＳに何覚醒しちゃってんの？

「う、うん、そうか。へぇ。……で？」
「はい？」
「いや、あのさ。俺、君を市長に預けたら金貰ってハイサヨーナラなんだけど」
「はぁ？　そんなの知りませんよ。ていうか、そんなことするつもりなら逃げますが」
ジト目で睨まれる意味が解らない。
「いや、無理だろ。俺は、仕事で君を市長のところまで連れて行くの。ね？　し・ご・と。綺麗に言えばお・し・ご・と。
だから、引き渡したら、俺はどこか違う街に行くか、あの街で仕事を探す。君の処遇なんか知らん。そもそも、付いてくるってあのね、俺の仕事はどうなるのさ？　そこらへん、解ってる？」
聞くと、ふむ、と小さく呟き、その手を顎に添えた。
そして、少しの沈黙。
シルベは顎から手を外して、
「――じゃあ、依頼放棄しちゃえばいいんじゃないですか？」
肩を竦めた。
「あー……」やべぇ、コイツ譲るつもりゼロだ。

完全にその気になっている。俺の依頼ホントどうなるんだよ……。
思わずこめかみを人差し指で強く揉む。鋭い痛みが走るが、そのおかげでどうにか思考をクリアに出来た。パチパチと何回か瞬きをして、頬を両手で叩いた。
よしっ、と気合を入れることにする。
目の前では、いつの間にか俺の焼いた野兎を喰っているドS女、もといシルベ。美味しそうに食べている。にこにこと、まぁ、美味しそうに。俺の悩みや、自分があと二日後には市長に引き渡されるなど知らんぷりで。
きっとテンションがハイになって、色々と考える気が無いんだろう。
それを見て、言葉を投げかける。

「あのさぁ……俺、街に着いたら殴ってでも君を市長のところに持っていくつもりなんだけどさぁ」

パクパクと食べていた口を止め、こちらを見るアメジストの輝き。続ける。

「君さ、……マジなの？」

「ええ、そうですけど。何しろ、帰る場所も無いですし。あの男のところへ行くなんて、嫌なんで」

……なんだろう、この、言葉に言い表しがたい感情。というか、否定の意。
確実にロジックを無視した、根拠も何も無い言い分に、言い表しがたい違和感がヒシヒシと押し寄せる。
軽い眩暈を覚えて、眉間に手を添えてその場にしゃがんでいると、

「――まぁ、化け物さんが色々どうにかしてくれますよね？」

コノオンナ、オレニゼンブナゲダシヤガッタ。

「うぅ……ぅあぁあ」

眩暈が酷くなった気がして、その場で唸った。

考える。

シルベはマジだ。マジで俺についてくるつもりだ。アレだ、『本気』と書いて『マジ』と呼ぶ血気盛んな人間に部類できる、アレだ。

勘弁してほしいと素直に思う。俺何？　あれか？　毎日こいつに制裁とかの名目で殴られる旅をしないと駄目なのか？　ホントに勘弁してくれ……Mじゃねえんだよ俺。

しかも自分の境遇が二日後には市長に引き渡され、その後は俺の干渉しない、アイツ自身の問題になるというのに、それも俺にほっぽってきた。最悪だ。俺にどうしろと。

最悪の結果になった。こうならないようにと、出来るだけ一時の殺意で接してくれるように対応してきたはずなのに、ミスった。

やっちまった！！

「あー、あぁぁあー、あ――、あ――――」

声を出して、とにかくぐちゃぐちゃしている脳内をすっきりさせようと思う。

そして、いい加減面倒くさくなったので決めた。

無かったことにしちゃえ☆

うん。これが最も簡単な解決方法だよな。
そう思うと、安心感から自然と笑みが生まれた。よしよし、と頷いていると。
「化け物さん。食べないんですか？　じゃあ私貰っておきますね」
ハッ、と顔を上げると、いつの間にか俺の分の肉まで喰われている。既に半分喰われていた。
おのれぇ、と軽く苛立つが、その美味しそうに食べる顔を見ていたら、一瞬いやな考えに囚われた。
いくら無視して無かった事にしようと、目の前には現実が待ち受けていたのであった。
その現実の、昨日とは少し違う態度に違和感が募った。
「あー……。あのさ」
「？　なんですか」
「いや……なんつーか。昨日と態度っていうか、性格、違わない？」
「はぁ……いや、まぁ、元からこんなですけど」
キョトンと目を丸くして、シルベは続ける。
「色々、化け物さんを憎んだり恨んだりしてますけどね。まぁ、その感情をいまは方向転換しているんです」
「何に？」
「義務に、ですよ。いつか化け物さんを殺す、義務です」

えっへん、とでも言わんばかりに誇らしげに胸を張るシルベ。胸を張るべきシーンではないと思う。殺人予告しておいてそんな風にされてもねぇ。

へぇ、と思わず笑った。いつのも笑みが灯る。

それを見たシルベが少し嫌そうに眉を歪めたが気にしない。

俺を殺すときたか。

くつくつと、笑い声が上がる。

「それがどうして憎悪の感情から変化するのさ」

シルベが、俺の目を見る。覗き込むように、じっくりと、でも熱っぽくなく平淡に。

知っている目だった。

恨みや憎しみ、殺意が爆発し終わり、次のフェーズに移行している。

冷めた憎悪とでも言えばいいのか。子供の癇癪が、大人になるにつれ、冷酷な刃物のような言葉となるような変化。

それが、いまシルベの瞳に感じられた。

子供の怒りまかせの言葉よりも、恐ろしい言葉を生み出す知性と理性と殺意を兼ね備えた思考。

そんなものが、シルベの中に生み出されているような気がした。

シルベが俺の目を覗き見、俺がその瞳を見て、そうして僅かな時が経ってから、

「私は、貴方を恨み憎み殺したいと願った人々の代弁者になりたいんです。ええ、私も当事者ですからね。ですから、これは正当な権利でしょう？

憎い相手を殺したいと願う。

嫌いな相手に死ねと思う。

ね？　普通でしょ？　私はそれに、素直になろうと思うだけですよ」

言ってから、また肉を食む。

その顔には、食物に捧げる笑みがあった。

にこにこにんまぁーにこっ。笑みは嬉しそうに口元を綻ばせ、目を弓にする。

確かに、何もおかしくない。狂ってもいない。純粋な感情の羅列に従った結果が、俺を殺すという単純明快な願望になっただけだ。

だけど。

素直すぎて、それ(気違い)が一巡して狂気になっている。

――壊れたのか？　この女。

昨日あれほどキレ、朝はあれほど絶望し、そしてそれを忘れたかのようにけろっと俺に付いていくという。

楽しいと思えば笑う。怒ったなら睨む。殺したければ腕を動かし足を振るう。

それは、例えば小さな子供がカマキリやセミの足をもぎ、ジタバタともがき苦しむ虫を眺め、楽しそうに醜悪な笑顔を浮かべるのと同じだ。

今のシルベは、純粋無二の子供の精神だ。

退行、だろうか。いや、違う。もし退行ならばあの言葉の、もっともらしい殺意の言い訳はなんだ？　あんなものが子供の精神で言えるわけが無い。

子供にだって外聞があるし、だから隠し事をする。ならば、嫌いな相手(俺)に死ねと願うなんて、言えるわけが無い。子供だろうと大人だろうとそうだが、嫌な相手に『嫌い』だなんて言う奴はまずいな

い。そうやって言うことの素直さがもたらす不味さに気付いて、ねちねちと影で悪口を言うのが常道だ。
だがそれをしない。
そう――それをしない事が意味する事実に――気付いた瞬間、俺の心には憐憫の感情が生まれた。

「……可哀想に……」

思わず、呟いた。シルベが反応し、こちらを見る。怪訝そうに眉をひそめた表情は、年に似合わず大人っぽかった。
続けろと促された気がするので、シルベに向かって言う。

「お前、可哀想だよ」

「は？　何がですか？　……もしかして、自分の行った事を棚に上げて、そんなことを言っているんですか？　事の発端は、誰のせいだと」

瞼を僅かに閉じ、すっ、と眼光が鋭くなる。やはり、冷たい殺意だ。
いや違うよ、と俺は首を横に振った。

「俺なんかをさ、殺すだなんて決める奴は、ホント可哀想だよ」

どろりと、俺を見る瞳に濃密な殺意が溜まった。溢れそうになる殺意は、言葉となって低い唸りを耳に伝える。

「……全部、貴方のせいじゃないですか……！　それを、棚に上げるつもりですか？　貴方は、神様にでもなったつもりですか？　自分の過去の懺悔一つで、泣くような人間が」

的確な言葉。冷静に怒り、ゆっくりと殺意を全身に漲(みなぎ)らせる睨みの表情。子供の大人(キッドプレイヤー)、そんな言葉が思いついた。
薄い笑みを顔に張り付けながら、違う違う、と首を横に振る。背中を虚空に預けるように後ろへ傾け、両手を腰の後ろで地面に付ける。
僅かに見下ろすような視線で、
「……続けるけどさ。一時の感情で殺意を抱くのではなく、シルベみたいに大義名分を掲げ、それを心の支えに俺を殺すまで動くのを止めない、死のうと構わず殺すとか、そういうレベルの精神の構えをする生きた死者(リビングデッド)みたいな奴は、本当に可哀想だよ」
解らないか？
「――自分の一生、俺のためだけに酷使するって、そう言ってるんだよシルベは。可哀想に。君の人生、もうメチャクチャさ。可愛いのに楽をするための夫を作れず、日々を楽しくするための友も作らず、人が人らしくあるための最低限の幸せすら放棄して、俺を殺そうと一人必死に体を動かす。俺のせいで苦しみの中で生き、復讐が、願望がようやく叶っても、結局その後に残るのは崩壊して何にも無い人生だけ」
薄い笑みの口角が、ゆっくりと上がっていく。
嘲笑に近い表情は勝手に、でも本心を言った。
「バカな決意したねぇ」

嘲笑う。
ケラケラケラケラ。

「……黙ってください。私の決意も願望も、私のものです。貴方なんかには、蹂躙させません」

手ごろな石を投げられる。首を振って避けた。頭に当たりそうなものは手で掴んだ。
行動は子供そのものだが、言う言葉ははっきりと芯を持って力を秘めていた。
だが、俺の口はそれでも止まらない。
知らず知らずの内に俺は――面白がっていた。
これだ。
俺は、人の願いや幸福や不幸を自分の手でメチャクチャにする、この時この瞬間が最高に楽しくて堪らない。
そして、この、他者の心を蹂躙する俺の狂楽趣味。それが俺のあだ名の所以だ。
他者の幸福を笑顔で破壊し、他者の不幸を笑顔で玩び、他者の決意も憎悪も何もかもを笑顔で蹂躙する、金さえあればいくらでも人を殺すお人形。
“笑う蹂躙人形”。
それは、悪夢に相応しい言葉と暴力の嵐だ。
人を憎み恨む俺は、全人類を殺したいと願うくらいには人が大嫌いだ。
そして、嫌いな相手に死ねと思うのは当たり前の精神機構。
心も肉体も殺して踏み潰して破壊して蹂躙してぐちゃぐちゃの挽肉にしてやる。
――待ってろよ全人類。

いつか必ず、人を広い定義で“殺す”俺が、きっと全滅してやるから。

「なぁシルベ？　――俺を殺して、その後の人生で幸福を掴めるだなんて思うなよ？」

シルベの顔が、僅かに震えた。

それを見て、更に笑みが深まって、口は更に饒舌になる。

「シルベの人生は、これからずっと暗闇さ。生きる価値を俺だけで消費する人生を歩む君が、俺を殺すこと以外で生きる価値を得られるだなんて、アホな希望は持っちゃいないよなぁ？」

ある意味、俺と同じさ。

「全人類を殺すまで動きを止めない俺と、俺を殺すまで動きを止めないシルベ……俺も君も、同じさ。復讐や私怨、酷く凍えて押し固まった殺意に駆られ動き、絶望の中で人生を生きる」

「……違います。私と、貴方は、違う。私は確かに、復讐心を持っています。ですが、貴方は、ただの殺人鬼だ。快楽殺人者だ」

感情を押し殺し、拳を強く握って振るわせるシルベ。怒りを堪え、必死に言葉を喉から引き絞り、出している。

その必死さが見え見えな時点で、俺に負けている。

「シルベの居場所を奪ったのは俺だけどさ、それでも、君にはまだ幾らでも生きる方法だってあるんだぜ？　なんなら、コネを使って働き先と寝る場所くらい準備してやろうか？　まぁ、依頼が達成されなかったら、になるけどな」

それでも？　それでも君は俺を殺したいの？
シルベは無言で、ただ俯く。下唇を僅かに噛み、俺の甘言を遮るように。
蹂躙の言葉は嵐となって、他者を傷つけるためだけの言葉を並び立てる。
ロジックも過去の自らの言葉すら無視して、ただの殺傷力を秘めた言葉に。

「人を殺すの、大変だぜ？　俺の生まれは人殺しが常識の世界だったから当たり前に人を殺せるけどもね。それでも、俺は親父を殺すまでは殺人を犯せなかった。人間、一番大事だった人を殺すと、殺人なんてもうどうでもよくなるんだよな。吹っ切れてしまうのさ。
だ、け、どぉ？　シルベ、お前の大事な人は俺が全て奪ってやったぜ？　俺を殺すっていう意味で大事な人なら、まぁ俺が残るけどさ。――でも、俺を殺せるのか？　銃を握っただけで震えた君が、俺を殺せるのか？」

だって君さぁ。

「――トラウマなんだろ？　銃を握るの」

「ッ！」

シルベの表情が、目を大きく見開き驚愕のものになる。
――その反応だけで充分な確証があるよねぇ。
哄笑が生まれた。

「ははっ！　武器もなしに人を殺すなんて、面白いことを言うねぇシルベは。いやいや、それとも、俺の心を殺したいのかな？　残念

だけど、俺の心はシルベなんかじゃ殺せない。修羅も地獄も、少なくとも俺と似たレベルのを味わっていないシルベなんかには、絶対に殺せない」

「……皆を全員殺しておいて、まだ、言いますか……！！」

「ああ、言うよ？　だって、シルベはあれじゃん？　弱いじゃん？　弱者であれ強者であれ関係無く徹底的に叩き潰してこその蹂躙だ。それに弱いんなら、手を繋げばいいのにね？　それもせずに俺を殺すだなんて、はッ、笑えるよホント」

「ッ！！　その繋げるはずの手を持った皆を殺したのは、どこのだれですか！」

「あー、悪い悪い。あんな些細な事、完全に忘れてた。殺人が常習化するのも考えもんだねー」

おかしそうに言ったら、シルベは唐突に立ち上がった。
表情は怒りで染まって、拳は強く握られている。

「貴方って人はァ……！」

「そう怒るな怒るな。……まぁ、確かに、人によっては俺の修羅も地獄も、その程度、って思うかもしれない。だけど、さぁ。それをシルベは言えないよねぇ？　だって、人の死体を見て気絶できちゃうんだもんねぇ？　あそこで眉一つ動かさなかったら、そりゃ俺以上の化け物さ。俺でも臭い程度には思うし顔を顰める。だけどシルベは、恥も外聞も無く悲鳴を上げて気絶しちゃったもんねぇ？」

「……当たり前です。それが、普通の、反応、です」

「おいおい、俺の言った言葉、忘れたのか？　俺を“殺す”つもりなら、俺と同レベルの修羅や地獄を味わってみろって」

「そんなの、貴方の価値観です。私は、私の価値観で、貴方を殺せる境地に立って見せます……！」

「……じゃあ、シルベの価値観に合わせて話すけどね？
死体を見て気絶、もしくは悲鳴をあげるのが、シルベの言う“普通”だとして、だ。“普通”？　シルベさ、計る定規、間違えてるよ。俺が“普通”なわけが無い。“普通”だったら、死体を見て気絶するか悲鳴を上げるはずなのに、そんなもの上げない俺が、“普通”なわけが無いだろ？　俺はシルベの価値観に於いて、異常なんだよ。以下でも以上でもなく、異常だ。それに、“普通”の価値観で挑むのかい？　無理に決まってる。異常は、普通が通用しないから異常なんだよ。それが解ってない時点で、シルベは俺を殺せない。絶対にね」

「……っ」

言葉に詰まるシルベを見て、更に笑みが濃くなった。
だが、まだ止めない。
ねぇ？　と口は動いた。

「シルベさ、人の肉を食べた事がある？　同属を食べる不快感を知ってる？　その不快感すら薄れていく心の恐ろしさを知っている？」

解らないでしょ？

「人の肉を食べるのが大好きな親父を持った子供の精神が、どれだ

け狂ってしまうか解る？」

解らないでしょ？

「愛し合う二人は喰らい喰らわれることで愛情を確かめ合うだなんておかしな常識を持った子供の精神が解る？」

解らないでしょ？

「緑の濃い自然に豊かな森を見ると焼き払いたくなるこの嫉妬心が、あんな緑だらけの幸せそうな村で生きていたシルベに解る？」

解らないでしょ？

「友人にナイフの切っ先を向けられて、唾を吐きながら『お前なんか友達じゃない』なんて言われた時の気持ち、解る？」

解らないでしょ？

「幼馴染がにっこり笑いながら俺を殺そうと迫ってきたときの絶望感が解る？」

解らないでしょ？

「親父が狂っていると理解したときの悲しみが解る？」

解らないでしょ？

だって君、

「――幸せだったんだもんねぇ？」

気がつくと、笑みの口調はナイフになっていた。切り刻み、人の心に土足で踏み入り荒らす、最悪(悪夢)の言葉の羅列。

あー、やべぇ。

楽しくて涙が出てきた。

ケラケラ笑い、細まる目尻に涙を溜めながら、言う。

「もう一度言わせて貰うけどね」

くすくすくすくす。

「――バカな決意を、本当にしたよねぇ」

ケラケラケラケラ。

小さな笑い声は、川の清流によって流されていく。

“誰も彼もが妄想癖” ↓ 望んだ願望は叶いますか？（後書き）

カニバリズムやサイコパスなんかの当て字ですがアレ、割と間違っています。正確な日本語訳ではないので、ただそういった意味の言葉だと、そう捉えてください。
にしても主人公、鬼畜っすね……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3307z/

Worst HERO.

2011年12月11日13時46分発行